

# 教育委員会協議会 会議録

平成 30 年度第 7 回教育委員会協議会

場所：高知共済会館 3 階桜

## (1) 開会及び閉会に関する事項

開会 平成 30 年 8 月 29 日（火）18：00

閉会 平成 30 年 8 月 29 日（火）20：52

## (2) 教育委員会出席者及び欠席者の氏名

出席委員	教育長	伊藤 博明
	教育委員	平田 健一
	教育委員	八田 章光
	教育委員	中橋 紅美
	教育委員	木村 祐二
	教育委員	永野 隆史（欠席）

## (3) 高知県教育委員会会議規則第 8 条、第 9 条の規定によって出席した者の氏名

高知県教育委員会事務局	教育次長（総括）	岡村 昭一
〃	教育次長	高岸 憲二
〃	教育次長	長岡 幹泰
〃	教育政策課課長	酒井 啓至
〃	高等学校課課長	竹崎 実
〃	高等学校課企画監（再編振興室長）	山岡 正文
〃	教育政策課課長補佐	泉 千恵
〃	高等学校課課長補佐	藤田 優子
〃	教育政策課教育企画担当チーフ	三谷 玲子
〃	高等学校課再編振興担当チーフ	池上 淑子
〃	教育政策課主任指導主事	小島 丈晴（会議録作成）
〃	高等学校課指導主事	石丸 右京（会議録作成）

## 【開会】

伊藤教育長	ただ今から県立高等学校再編振興計画の「後期実施計画」に関する平成 30 年度第 7 回高知県教育委員会協議会を開会させていただきます。本日の議事録への署名人は八田委員、よろしくお願いたします。
八田委員	はい。
伊藤教育長	本日の教育委員会協議会につきまして、ご説明をいたします。本年度第 7 回目、通算では 17 回目の教育委員会協議会となっております。5 月に「後期実施計画」の「中間とりまとめ」が出されまして、それを基に各学校や地域で振興策を検討し、9 月の最終とりまとめ案の発表に向けて準備をしておるところでございます。 本日、前半では中山間地域の 9 校の校長先生から、これまでも検討いただいて

	<p>きました各校の振興策案の概要につきまして発表していただくことになっております。</p> <p>後半につきましては、窪川高校と四万十高校の学校の在り方についてご協議をいただくことになっております。7月13日に窪川地域、それから7月17日に大正地域でそれぞれ協議会を開催いたしまして、学校関係者や地域の方々からご意見をお聞きし、3案の中から案1の両校存続と案2のキャンパス制の二つの案に絞らせていただいております。二つの案の中から、協議会として一定の方向性をご協議いただきたいと思いますと考えております。</p>
--	---

**【議題】**

**(1) 中山間地域の高等学校の振興策について**

伊藤教育長	<p>それでは早速、議事に入らせていただきたいと思います。</p> <p>最初に、中山間地域の高等学校の振興策についてということで、本日9名の校長先生においでいただき、お忙しいところありがとうございます。順次、それぞれからご説明をいただきたいと思います。別紙の次第の順番で、まず嶺北高校学校長からご説明をお願いすることといたします。非常に短い時間に簡潔におまとめいただくこととなりますけれども、説明に大体5分、それから委員会の質疑を大体5分とさせていただきますと思います。</p> <p>それでは、嶺北高校からお願いをいたします。よろしく願いいたします。</p>
嶺北高校 山田校長	<p>今日は貴重なお時間をいただきどうもありがとうございます。</p> <p>まず、資料を簡単に説明させていただきます。1枚目、A3横長が全体像でございます。今年から数えますと6年後、2023年には嶺北高校を取り巻く環境をこのような形にしてみたいという全体像を書いてございます。</p> <p>2枚目でございますが、我々が6年間取り組む中での目標指数でございます。例えば生徒数の推移、生徒数を増やしていくということを一つの目標にしたり、グローバル化、学力の向上、部活動の魅力化、自主活動の推進、自己啓発スキルの向上というような点を目標指数として定めて、6年間で高めていくということを考えております。</p> <p>最後、その裏をご覧ください。こちらはこの2023年までの5年間あるいは6年間で、嶺北高校が主に取り組んでいく取組を取組1から取組6としてまとめたものです。一番左側がこういった取組の内容なのかの概要、そして2018というところがその説明ということになっています。</p> <p>それでは最初の地図的なものをご覧ください。嶺北高校の校舎と体育館、そして農業棟、そしてその前を走っています439号線、北側を流れております吉野川、そして早明浦ダム湖、左側上側にドラゴンのような小さなものがありますが、早明浦ダム湖です。地域をあげて嶺北高校を活性化することで地域を高めていくということをイメージして、この図の中に落とし込みをいたしました。</p> <p>嶺北高校では、すでに昨年度より嶺北高校魅力化の会というものが立ち上がっておりまして、嶺北地域4ヵ町村の首長と嶺北高校校長により、嶺北高校を魅力化していくことで地域を活性化させていく、という合意がなされておりまして、本年度4月より具体的な取組を始めてまいりました。その中で三つのポイントで本校の振興を考えております。</p> <p>これは書いておりませんので口頭でお話させていただきたいと思います。1</p>

点目は嶺北地域住民の幸福を実現するために、持続可能な地域社会のリーダーとフォロワーを育成していく市民教育システムを嶺北高校の中で育成していきたい、構築していきたい。2点目、嶺北地域の文化、教育の核として地域の保・幼・小・中学校、行政、公的機関、企業等に学校を開いていき、徹底的に提携した学校づくりを行う。3点目、生徒による自治を強化するとともに、在校生も卒業生も母校や地域とのつながりを常に感じられる学校のシステムを再構築していく。そのような考えを持つに至りました。

そして、昨年度から始まっております魅力化の会でも謳われておりますが、生徒が行きたい、保護者が行かせたい、地域住民が活かしたい、そういった学校づくりを持続可能な地域社会の核としての学校づくりとして進めてまいりたい。そして学校としては五つのポイントを取組として掲げております。簡単にご紹介いたします。

取組の1は、「海外とつながる」システムを構築していく。現在、嶺北高校には、海外研修等のシステムがございません。海外からの留学生もおりません。そこを海外で研修をしたり、海外の若者を受け入れる環境をつくっていきたくと考えております。

2点目、「数学、国語、英語で10年間がつながる」教育システムを構築したいと考えております。これは嶺北高校に来ている本山町の嶺北中学校と土佐町中学校の生徒さんが96%でございますので、地域の保育園、小学校、中学校で育てているわけであります。そちらの先生方と高校の教員が10年間、小学校3年生から高校3年生までの目線合わせをしていきたいと思っております。

具体的にはCAN-DOリストと言われております、何ができるようになったらいいのかというところを中核にして、小学校3年生ではこういうことができるようになる、4年生、5年生、中学校に上がったならレベルが上がってこういうことができるようになる、というような目線が合わせることでできたら、高校3年生までの教育を見渡した地域の教育ができるのではないかと考えています。

取組3、4、5をまとめて申し上げますが、新しい学習指導要領が始まります。高校では平成34年度からでございますけれども、学習指導要領に則りまして現在のカリキュラムを再度、見直しをして「志望大学につながる」文理のコース、「地域の未来につながる」農業や商業がコラボレーションしていくようなことができるカリキュラムがつくれる商業コース、農業コースの構築。そして最後に、「総合的な探究の時間」を使って起業家育成の種まきができたらと考えております。

最後になりますが、この1枚紙の左側にSD会議というのがございますが、これはスポーツデザイン会議と言いまして、具体的には、嶺北地域の子どもたちが関わっていくスポーツをどういうふうに大人たちが準備していくかということです。ご存知のように、嶺北地域は町をあげてカヌーに力を入れている地域でございます、本校にもカヌー部がございますので、何よりもカヌー競技が振興することは目指しておりますけれども、そのほか小学校、中学校、高校とつながっていきけるような部活動の在り方、あるいはスポーツの在り方というものを地域のスポーツ関係の代表者等、あるいは教育関係の代表者と話をし、スポーツ競技の取り合いにならないように、将来のことを考えていくという会議が立ち上がりました。

以上、簡単ではございますけれども嶺北高校の4年間の振興、目指すところをご説明申し上げます。どうもありがとうございます。

伊藤教育長	<p>ありがとうございました。委員の皆様からご質問ございますでしょうか。</p>
八田委員	<p>全体の像としてはいろいろと考えられていて良かったと思うんですけど、具体的には土佐町小学校、中学校からの進学はなかなか伸びないような感じがしているんですけども、土佐町中学校さんと何かこの中高一貫を地域で、ということはあると思うんですけども、もう少し密にやるようなことになるんですか。</p>
山田校長	<p>はい。土佐町中学校及び嶺北中学校、嶺北中学校は同居しておりますけれども、両町からの進学者は今 39%ということになっております。どちらが特にということはないと我々考えておりますけれども、中高連携というところで、接続期中3生と高1生を中心に今まで取り組んでこられました。トータルで中1から高3まで、で連携することを考えていきたい。教科指導の点でということになります。それと、小学校との連携を考えていきたいと思っています。</p> <p>具体的には、義務教育は研修会とか参観授業をたいへん発信しておりますので、まずはそちらに高校教員が英語、数学、国語を中心に参加をして、先生方と顔見知りになって、どういう取組をしているかを学び、そこから高校との連携を具体的に考えていくということになるかと思っています。これまで同様、スポーツ面とか文化的な面とかでの連携、例えば吹奏楽と一緒に演奏会をするだとか、体育の運動会を一緒にするだとかということは、土佐町中学校は少し距離が離れてますので、これまで十分ではないところもありましたので、そういったところは強化してまいりたいと思っています。</p>
八田委員	<p>中高一貫でそういう課外活動的なことも、この10年のCAN-DOリストという話があったんですけど、そこはぜひしっかりやる必要があると思っています。具体的には、もうD層がなくなるような中学校の教育をちゃんとしなきゃいけない。D層がいなくなって、皆でそこに来てくれる。もちろん中学校の先生が頑張らなきゃいけないところなんだけど、そこを具体的に目標に持って、この地域ではもうD層の子は出てこない、皆を受け入れてもD層の子はここにはいないよっていうところまで、ぜひ何か目標にして中高連携で協力をしっかりやっていただければと思います。</p>
木村委員	<p>海外とつながるシステムの構築と書いてありますが、考え方は非常にいいと思うんですが、現在では、そういう海外とのつながりというところの糸口は何か考えておられますか。</p>
山田校長	<p>糸口は、土佐町から農業に取り組む方が、現在ニュージーランドで牧場を営まれていると聞いておりました。本校の教員との関係がございます。その方は、北海道からニュージーランドの視察で行かれた方々が訪れる牧場経営をされているので、ニュージーランドは時差も2～3時間ということで昼間の交流もできる。そして、長期休業中2週間程度、語学研修なんかも兼ねて行くということもできると。県も海外との研修はニュージーランドで行うなど、治安の面でもよろしいということがあって、現在ニュージーランドで検討しております。</p>
平田委員	<p>ご説明詳しく聞かせていただきましたが、単純に質問ですけど、地域内の進</p>

山田校長	<p>学者数、今年は 39%ですか。</p> <p>そうです。嶺北中学校と土佐町中学校で卒業者が 41 名おりました、そのうち 39%の 17 名が本校の方に入学をしてくださいました。</p>
平田委員	<p>次年度が 60%目指しておりますけど、主な嶺北中学校、土佐町中学校、その感触はどうなのか。また、地域外から各年 3 名ぐらいずっと受け入れていこうとなっておりますけど、目玉は外国語の教育、カヌーとか書かれてございましたけど、この点を考えられているのかどうか。その 2 点を少し教えてください。</p>
山田校長	<p>地元の嶺北中学校、土佐町中学校からの来年度の進学者につきましては、今年よりも多いと土佐町中学校の校長からは聞いております。キーになっておりますのは、本校で何年ぶりか、卓球部が復活をしまして、同好会から部に昇格して県の体育大会でも活躍して高知新聞等で取り上げられました。その後輩の皆さんがいらっしゃいまして、中学 3 年生に、嶺北高校へ行って卓球をしようという機運が高まっていると聞いております。</p> <p>もう一点の県外からの中学生については、6 月末から 7 月にかけて福岡、名古屋、大阪、東京に学校説明に行っていました。その方々がこの夏休みに現場を見に来てくださいました。大体 7 組ぐらい、親子で来てくださったというケースもあります。そして本日は、滋賀県大津市にございます琵琶湖で普段、カヌーのトレーニングをやっている中学校 3 年生の中学校の教頭先生から問い合わせがありまして、受検を考えているということがございまして、願書や届け出のことについて教えていただきたいということがありましたので、6、7 月ぐらいいまでは種まきをしまして、8 月の、今日も含めまして、そこそこ手応えが今はございます。そのような状況でございます。</p>
伊藤教育長	<p>よろしいでしょうか。そしたら、どうもありがとうございました。</p> <p>それでは続きまして、高知追手前高校吾北分校の藤中校長。</p>
高知追手前 高校 吾北分校 藤中校長	<p>貴重なお時間ありがとうございます。よろしく申し上げます。</p> <p>資料の 4 ページの今後の吾北分校の魅力化について、A 3 横長の資料を使いながらお話をさせていただきたいと思っております。</p> <p>今後の吾北分校の魅力化につきましては、地元いの町、地域の方、PTA の皆様方、有識者、そして県の地域産業振興監、いの町内の中学校の校長、小学校の校長、それから分校の在校生、そうした方にメインに入ってもらいました。その開かれた学校づくり推進会におきまして、この 4 月以降、分校の現状、それまでの取組の共有、課題の洗い出し、課題解決に向けた方策について協議を進めさせていただきました。その結果について、この表は左が現状、こういった対策をしたのか、そこに対して委員会の皆様方、あるいは学校としてこういった課題があるのか、そして、そういう課題に対してどう振興策を打っていくのかということをもとめさせていただいたものでございます。</p> <p>その中で、吾北分校におきましては、地元中学生の数は減少する中で、分校の存続の方法を考えるとすれば、大きくは地元中学生、特に普通科系の高校に希望の生徒の入学をいかに誘導していくか。そして二つ目として、生徒数確保という視点が大きく必要になってきますので、地域外からも入学者を増やす。そ</p>

の計画で生徒数を確保することが大事というご意見が多数でございました。

そこで、分校に生徒が入学したくなる魅力とは何なのかについてご協議をいただいた中では、進学校と同じ教育課程で先生から指導を受け、希望の大学進学ができるカリキュラムや指導スタッフ、そういったスタッフのいる学校。あるいは自分のペースに合った進度で授業が進められる学校。そして、中学校まで頑張ってきた部活動を続け、県内で上位に入賞することができる部活動がある。そして、地域の中学生在が分校の生徒や先生を身近な存在として見られる学校。そして、地域外からも生徒が通学しやすい環境があること。最後は、地元で頑張れる仕事に就くことができる。こういったことが魅力につながる、分校に生徒が入学する学校になるという視点が不可欠であると取りまとめをさせていただきました。

それでは、その魅力を実確なものとするためにはどうするのかということについては、右の端にありますような大きく五つの点についてご意見をいただきました。

一つ目として、個々の生徒の進路保障とございますけれども、個々の生徒が自分の学習進度や進路希望に合った授業を受けられる環境が必要であると。また、本校、分校という高知追手前高校の魅力を十分発揮するという意味で、本校の生徒や教員が吾北分校にとって身近な存在として感じられる環境にあるということ。

二つ目の部活動の活性化では、高校に進学してもさらに専門的な指導が受けられて、勝利できる部活動があることが大事だということ。

三つ目として、地元小中学校との交流では、日々、身近な存在として地元の中学校と分校の先生、生徒が関わっている環境になっているか、そういったところが大事ではないか。

四つ目として、安心である生活環境では、通学しやすい交通機関の確保であるとか、通学できない地域の生徒が通える寮があるとか、などが必要になってくるだろうと。

そして最後の五つ目として、地域に貢献できる人材の育成という部分でございますけれども、高知、さらに言えば地元で働くことを選択するとき、仕事がある、これが不可欠である。現在、地元の町の総合戦略であるとか、県の「産業振興計画」というところにリンクした動きにより、雇用を創出する取組が進んでいるけれども、では学校はその地域の良さや魅力をしっかりと体験して理解できているか。そういう場が必要ではないか。また、生徒自身が自分の手で雇用の創出につながる企画とか提案ができるような機会が生徒たちに必要ではないか。そういったところを資料の具体的な振興策にまとめていただきました。

右端に書いてある五つの部分について、この方向性で進めてやっていこうと。ただ、進めるにあたっては、来年できることと、1年かかることがあるのではないかと考えられます。そういった意味で、例えばハード面の問題であったり、それから寄宿舎、寮にあたるもの、あるいは通学しやすい交通機関については一定の期間の議論が必要であり、構築をしてやっていくとするならば、平成 32 年度の1年生入学者をトップにしながら考えていく時間が必要ではないか。

一方で、部活動、小中高の交流強化、あるいは地域に貢献できる人材の育成、こういったことはこの平成 30 年度中に議論をし、そして平成 31 年度の1年生から対応できるような形が取れるのではないかと。

そういった考え方で振興策を取りまとめていただきました。この振興策につきましては、1番大きなポイントはいの町との協議でございしますが、いの町との協

	<p>議は再三にわたりまして意見交換をし、一定この資料を合意形成のもとに、いの町と一緒にやっていくという方向でつくらせていただきました。</p>
伊藤教育長	<p>ありがとうございました。ただ今の説明につきまして、ご質問等ございましたらお願いします。</p>
木村委員	<p>放課後の支援、進学講座というのは今では何人ぐらいいらっしゃるんですか。</p>
藤中校長	<p>現在、全校生徒は45人ほどで、今年1年生が5名、非常に少ないということですが、2年生が18名、3年生が23名でございます。その中で、大学進学講座については、上位の本当に少ない子どもたちになってくると思います。逆に、放課後の補習については、D層の子どもたちは全体の7割ぐらいいますので、そういった子どもたちに対しての対応ということになります。</p> <p>ただ、全体の人数が少のうございますので、一人一人の状況を踏まえながら指導できるということは学校の利点ではないかと思いつつ、今、左端のようなツールあるいは方法を使って指導をしていくということになります。</p>
中橋委員	<p>課題のところ、「イベント的」という言葉が2回出てきていまして、多分その場限りで終わっちゃって、前後続いていないということなんだと思うんですけども、それが小中高の交流であったりとか地域貢献などでやっているんだけども続いていないという話だと思うんですが、今後のその振興策の中で、前後を続けるという話が、例えば日常的な交流とかいう言葉で表れていると思うんですけども、何か具体的にこういうふうにしていこうという話は出ているんでしょうか。</p>
藤中校長	<p>小中高との連携、交流部分のイベントといったのも、数の少ない生徒さんたちが対応するとなると、どうしても一人何役もしていろいろな関わりがある。いろんなことを一人がやっていく中で、どうしても同じ子どもたちに全部しわ寄せがいくというようなことがあるので、そういった意味で、小中高の交流の部分に対しては、特に地元のすぐ横にいる吾北中学校、今年1年生が5名のうち2名しか入ってきていないですけど、来年度は例年通り10数名は入学していただきたいと今動いておるところです。やはり身近なすぐ横にいる学校の生徒さんたちから、吾北分校の教育の姿が見える化できているのかというところが1番のポイントとっております。</p> <p>イベントではなく日々365日の関わりを持つという意味で、本校については中高一貫の連携のあるような学校ではございませんけれども、例えば中山間の中学校は芸術科目は、1人が2役という形で、中学校の先生が数学をやりながら、体育もやりながら、美術をやるとか、どうしてもそういう状況が、10科目も対応しようとするとなると。ならば、分校には芸術の教員がいて、本校と連携を取りながらいるので、そういった先生方が中学校に教えに行く。例を言えば、分校には音楽教室がございませんが、吾北中学校には音楽教室がございます。ではそこで、分校の子どもたちも学ばせていただく。あるいは逆に中学生ももちろん。そういった形の日常的な授業の連携を取りながら、分校の先生方の前を通ったときは、あの先生は誰だと分かってくる。やっぱり情操的な部分、英数国という教科よりも、芸術とか非常に効果があるということで、そういったところを交流という形でやっていきたい。その部分については中学校側の教員を使う、こちらの高校側</p>

	<p>の教員を使うということで対応できる部分ではないかと。そうすればあまり大きなハードルがないといったところで対応したい。</p> <p>地域貢献のイベントについては、まさに子どもたちが一杯一杯の状態になっていますので、やはり3年間の教育課程でしっかりと地域を学び、そして自分の役割を見い出していくという3年間のプログラムにしていきたい。それが今までイベント的にやってきていたというところの反省になっています。3年間連続した部分でやっていきたいというときにやはり課題は、地元で自分の仕事を求められるような状態を子どもたちが学んでいくということなので、県の「産業振興計画」、あるいは町の振興策とリンクさせて、こういった仕事をつくっていくところに、吾北分校は何か手を貸せないかという課題を持って、課題研究をしていくといったような形を思っています。</p>
伊藤教育長	<p>ありがとうございました。そのほか、ございませんでしょうか。藤中校長、どうもありがとうございました。</p> <p>続きまして、窪川高校の田邊校長、お願いをいたします。</p>
窪川高校 田邊校長	<p>窪川高校のご説明をさせていただきます。資料は5ページですが、資料に入る前に現状ご存知かもしれませんけれども、窪川高校は窪川中学校が隣にありますので、私としては、窪川中学生の入学を50名ぐらいを確保することが喫緊の課題と思っています。窪川中学校の卒業生はあと5、6年ぐらいは80名～90名ぐらいで推移しますので、そこから半分以上と考えております。</p> <p>その流れの中で、今1番大事だと思いますのが、資料の中には1、2、3というふうに、部活、ICTも出していますが、最後のその他のところに書かせてもらっています。四万十町との連携の「四万十町教育プラン（仮称）」、これはあとで四万十高校の山本校長先生から報告があると思うんですけども、教育推進プログラムというのがありまして、それをもう少し小学校、中学校、高校と1本筋の通ったものに絶対しなくてはいけないと思っています。</p> <p>具体的に言いますと、12年間を3で割って4年間ずつのプログラム、プレの小学校4年生まで、それから小学校5、6、中1、2の前期、中3からの後期というふうに4年間ぐらいに分けて、そこに、大きな柱として課題探究を、「総合的な学習の時間」のプラン等を利用して一貫性のあるものを入れていったらどうかと。これはまだ窪川中学校と協議したわけではないですけども、自分の考えとしては、窪川中学校の3年生で地域への思いとか、そういった探究の初歩みたいなものを入れてもらえれば、そこで地域への思いが高まったものを、より高度な探究学習のカリキュラムを我々高校がつくることで、その生徒さんにアピールできるのではないかと思います。ひいては卒業して、窪川地域に帰って来る生徒もいて、子どもたちを増やす地域振興にもなるのではないかと考えています。町には案を示して、これから半年間見据えていきたいと思っています。</p> <p>資料3のその他の①の四万十町との連携ですけれども、新聞等でも報道がありますけれども、公設塾「じゆうく。」を今のところは学力向上と探究学習が主になっているんですけども、ここをもう少し学校にちゃんと入れて、学力向上もそれから探究学習も学校のカリキュラムの中に、魅力化コーディネーターがおりますので、コーディネーターを中心としてカリキュラムの中に入れてものにしていきたいと思っています。</p> <p>魅力化コーディネーター、私も半年間付き合いましたけれども、今のところコ</p>



ーディネーターの本来の役割というよりは、学校の分掌とかそういった役割に少し引きずられておりますので、「総合的な学習の時間」のフォローをしながら、独立した形にしていきたいと思っております。それがまず1番目の四万十町との連携と思います。

それから③にありますけれども、これは今2名おるんですけれども、このうちの1名が島根県の津和野高校でもコーディネーターをやっておりました。学校現場に明るいですから、この方をもう少しキャリア開発カウンセラーみたいな形に変えて、本校は少人数規模ですから、その子たちに徹底的な面接指導をして、1年生のときから面接等振り返りをしながら、キャリア教育を3年間で形成していくイメージを考えています。

これは高校ではホーム担任が担っていると思うんですけれども、現状ホーム担任は1学期に1回面接、公的な面接をすれば、掃除の時間ですとか、そういった時間に思うんです。なかなか多忙でもありますので、少人数ではありますけどその声が聞けないような現状がありますから、そこを振り返ることで進路指導に活かせることで、進路の向上ができるのではないかと。そして結果を中学校にフィードバックすることで、より魅力をアピールできると思っております。

それから、1の部活動としましては、現在3年生が引退してからなかなか活動できてないような部もありますけど、大きいのは音楽部ということで、軽音楽なんですけども、全校生徒90名中30名ぐらい、3人に1人が音楽部に所属しているような状況です。音楽つながりもありますので、四万十高校とも連携しながら、さっき申しあげました四万十町の教育プランの中に、人間教育とか音楽教育とかを入れてもらって、そこで両校の存在意義を高めたいと思います。著名人も、これは勝手な思いなんですけども、呼んでいただいて、音楽的な表現力の向上にチャレンジしたいと思っております。

サッカー部は、かなり熱心な指導者なんですけども、少年との連携はできているんですけれども、中学校との連携はもう少し、まだ問題を抱えておりますので、その辺を今後手を入れて、中学校と高校の連携をしながらと考えています。佐賀中学校の方面では新聞記事にも載りましたので、サッカーの専門指導者がいることでいろいろな質問を受けるし、体育ではサッカー部が1番魅力化になると思っております。

③の地域課題探究部ですけど、現在、同好会をつくろうという盛り上がりが生徒からありまして、その子たちを巻き込んで地域課題を「じゆうく。」のスタッフに、メンターというか伴走者として走っていただいて、地域課題の探究をしながら、これは中学校の方に呼びかけて同じジャンパー等を着用するとかいうふうにして、一貫性のある探究活動をしていきたいと思っております。

2のICTに関しましては、進路指導と学力向上に、他校でも同じようなことは出るかもしれませんけれども、十分活動できると思っております。具体的には、本校の教員も入れ替わりが激しいことがあったり、レベル的にも若いことがあって、進路指導力も少し不十分なところもありますので、遠隔教育も利用しながら他校と一緒に、面接指導とか討論とかをやっていく中で、力が生徒、それから教員の両方につくのではないかと考えております。

進路指導の経験豊富な学校の教員も、できればそういった遠隔を使ったときにうちの進路検討会に入っていただいて、具体的なアドバイスをいただければ、教員のスキルアップにつながるということと、さきほど話したキャリア開発コーディネーターもここに入っていただいて、少人数を活かした丁寧な進路指導で結果

	<p>を出していきたいと思っています。</p> <p>学力向上については、アクティブラーニングを中心としたような ICT を活用して、新大学入試に向けて学力向上対策ができます。スタディサプリが少しまだ使用が甘いところがありますので、今後タブレットを持つとか、していただければより良い学習環境になると思っています。以上です。</p>
伊藤教育長	<p>ありがとうございました。ただ今のご説明に対して、ご意見、ご質問等お願いをいたします。</p>
平田委員	<p>ご説明ありがとうございました。校長先生から冒頭に窪川中学校から次年度は 50 名というお話がございました。なぜ、この窪川高校の隣の窪川中学校から進学希望者が少ないのかという分析をして、窪川高校の学校改革に取り組んでいただきたいと考えておまして、大変、校長さんにとっても辛い立場だと思えます。窪川中学校、250 名くらいの生徒数で、窪川高校は 100 名を切っていると思えます。そういう状況で高等学校へどういうふうになれば進学率が上がるかという、大変厳しいところがあると思えます。</p> <p>いくつかこういう部分のお話もございましたけど、例えばサッカー部を活性化したいとお話の中で、少年とはいいのだけど中学校の連携に問題があると。その辺が何かなど。その辺がどうも、もっともっと分析をして、高校の活性化につなげていただきたいと思えます。そこをポイントに学校改革をして、地域に信頼される窪川高校になっていただきたいという思いを持っております。</p>
田邊校長	<p>窪川中学校から窪川高校への進学率が 3 割というのは、もうここ 10 年、20 年になる話ではない話で、人数の多いときからそういう形ですので、ここを変えるのは本当にパラダイムシフトではないですけど、考え方自体を変えなきゃいけないということです。先ほども言いました 12 年間の四万十町のストーリーで、やっぱり小学校、中学校、高校と生徒をちゃんと見つめて、地域への帰属意識みたいなものを高めることで、さらにそこを発展させるなら窪川高校はこういった魅力があるよ、というところがあると思えます。</p> <p>同時に、今、言われましたように人との交流ということがすごく大きなところがありますので、部活動、それから教科の交流、プロジェクト化も考えて、英語では 10 月ぐらいに中高の教員が集まって、接続期の指導のカリキュラムマネジメントを利用してやるような方法はしております。</p>
平田委員	<p>ぜひ、校長さんの気持ちを持って、窪川高校の改革に取り組んでいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。</p>
八田委員	<p>窪川中学校の部活動の状況とか、もし分かれば。どういうところにたくさん生徒が行っているのでしょうか。</p>
田邊校長	<p>ソフトボールですかね。野球とかソフトボールとか盛んです。とにかく窪川中学校は人数が多いので、窪川中学校の先生が疲弊するぐらい、いろいろな部活動が盛んです。強い生徒はやはり高知市内校へ抜けるような現状がありますけれども、多いのは野球とかソフトボールが多いですね。あと、女子ではバレーボール。</p>

八田委員	<p>ソフトボールとバレーボール。その辺を窪川高校で何とか力を入れていくというのは難しいんですか。クラブ活動はかなり進学動機になっているので、そこであえて、サッカー部ももちろんいいとは思うんだけど、ソフトボールとかバレーボールに力を入れれば、そこで窪川中学から来るようになるということにはならないんですか。</p>
田邊校長	<p>これは聞いた話なんですけど、数年前に女子バレーボールが交流や練習とかを一緒にやったのですが、余り窪川高校に来てくれなかったということもあって、多分、人と人の付き合いですので、相性とかあったのかもしれないんですけど、むしろ、特に女子の方は考えていきたいと思います。</p>
伊藤教育長	<p>ほか、ございませんですか。どうもありがとうございます。 続きまして、檜原高校の高橋校長、よろしく申し上げます。</p>
檜原高校 高橋校長	<p>よろしく申し上げます。7ページが資料になりますけれども、まずその裏面をご覧くださいければと思います。これは今年の春の檜原高校卒業生の進路状況になります。その状況から自分なりに二つのことが言えると考えております。</p> <p>まず一つ目は、一定レベルの生徒が集まれば、54名の卒業生ですけれども、中山間の学校でも十分やれるということです。その学年では昨年夏の甲子園の予選でも準優勝という結果も残しています。</p> <p>二つ目は、今の中学生、保護者、中学校の先生方、またマスコミを含む一般の方々の思い込み、要は中山間の学校に来ると心もとないような不安。そういうものが変わらない限りは中山間の生徒は地元に残ってくれない。そのイメージを破るためには、本当に思い切った施策が必要です。人、もの、金、そういうものも含めて、変えていかなければならないと思っています。時間が限られていますので、資料に沿って説明させていただきたいと思っています。</p> <p>まず、課題としては、左上になりますけれども、その地域の学校でなければならない、その良さをいかにアピールできるか。できる学習ができているか。二つ目が、希望進路が檜原高校でも心配なく叶えられると思える状況をつくれるか。三つ目は、学力の向上を目に見える形で、そして実績を示すことができるか。四つ目には、特別活動で成果をしっかりと上げること。五つ目に、今年地元中学から93%、連携中学校の東津野中学校を合わせて77%、合計30名です。それでも2クラスを維持する41名以上には10名以上足りないということで、今年は41名の入学生で11名が地域外から来ていますけれども、そういうことがしっかり示せるためには魅力がやはり要るんだろうということです。その五つを掲げまして、それぞれに具体的な内容として下に対策を載せています。</p> <p>まず、対策1としては、檜原高校独自の地域学習を徹底的にやりますので、その中でしっかりとした、商品、特産品開発や神楽の伝承を行う。また、三つ目が、右上にありますけれども、その三つのコース制をいかにしっかりと地域に示すことができるか。今、農業コースでは、本当に実践的な取組、資格試験を行うというようなことをしております。</p> <p>対策2として、進路の実現については、昨年度の状況は今見てもらいましたけど、今年度については3年生31名の卒業になります。その内10名ほどは今国公立大学を目指しています。今年は前年みたいな難関私立というところはいませんが、それでも頑張っている状況です。1、2年生については楽しみな生徒もいて、医</p>

学部そして難関大学にチャレンジしようという生徒もいますので、徹底的な計画を立てて、PDCA サイクルを回し、チーム学校で取り組みたいと考えています。

対策3として、ICT の環境には十分ではないんですけども、具体的に言えば、Wi-Fi とかタブレットがあれば、その環境を利用してセンター試験対応とか補習を通じて、アダプティラーニングと書いていますけど、これは民間のビッグデータの活用になります。民間と協働するようなビッグデータを活用した学習、それから今年秋から遠隔教育がスタートしますので、それらを活用して他校との合同補習とか、英語のディベートを行う予定になっております。

これらは生徒の学習はもちろんですけれども、教員にとっても幅広い層の生徒への取組が必要になります。それは、教員の指導キャリア形成にも間違いなく反映できますので、そういう面でも市内校だけで固定化される教員のキャリア形成ではなく、必ず本校のような中山間の学校を経験する。そこでしっかりと ICT などを活用した授業をやることで、OJT が形成できればいいと思っていますし、例えば教育センターの指導主事が本校に配属されて指導にあたる。そういう面でも OJT を有する学校であるとか、それも一つのイメージとして自分は考えています。

特別活動としては、今野球部、アーチェリー部などの実績がありますが、さらに効果を上げるためにはスペシャルな指導者が要するというので、アーチェリーに関しては、何が何でもそのスペシャルな指導者がほしいと考えています。また、生徒 10 名ほどが定期的に移動できれば、特に県境の学校ですので、愛媛なんかにも遠征ができます。そういう面でこの 10 人乗りのワゴンカーなどがあれば、さらに効果が得られると考えています。

最後に、これらの活動がすべて順調に進むためにも、まず生徒数の確保が本当に必要です。そのためにはどうしても先ほど言うように、地域外からの生徒が大切になりますので、寮は絶対必要です。この寮ですけども、今の時代に合った生活空間、環境が今のところでは非常に苦しく、4 人部屋というような生活をしています。そうではない生活空間をぜひつくってあげて、そして地域外の生徒が入学したい、わざわざ禰原高校に行きたい、という学校になれば、全国に通用する学校になれば、うちの学校としては何年間かは頑張れると思っています。

禰原町の絶大な協力もいただいております。また、10 年以上にわたって、地域でさまざまな支援があります。一つは、「魅力ある禰原高校を創る会」というのも 10 年以上も続いています。また、連携中学校との定期的な協議も行っています。地域と一体となった学校として、例えば地元の大学から推薦枠をいただけるような、そんな実績が十分あると思っています。そういう面でも地域創生の高大連携の学びの場、拠点、そのようなことを積極的に行政も含めてやっていただければ、ますますの魅力につながると考えています。

簡単になりますけれども、以上で報告をさせていただきました。ありがとうございました。

伊藤教育長

ありがとうございました。そうしましたら、今のご説明につきまして、ご意見、ご質問ありましたらお願いをいたします。

平田委員

皆さんの考え、大変よく具体的ということで、改革的に取り組まれているというご説明であったと思います。禰原高校は本当に中山間地域で活力ある高等学校だと私も思っておりますし、地元からの進学率も大変高いということで、校長さんのお話もありましたように一定レベルの生徒を集めて、十分指導をすれば、全

高橋校長	<p>国に通用する子どもに育てることができるというお話もございまして、大変心強いお話でございました。</p> <p>それで、今年の入学者数を少し見ておりましたら、地域外から 10 数名入学していると思いますけど、それは橿原高校の何に魅力を感じて地域外からの入学生が集まってきたのかというのを教えてください。</p> <p>今 1 年生、2 年生辺りで本校に来ている生徒で、野球部が多いのは事実です。野球を求めて、今年は東京それから隣の愛媛県から 1 人ずつ入学をしてきてきています。また、2 年生になりますけれども、橿原町に留学制度というのがございまして、町が 1 年間だと 100 万円、半年だと 50 万円という支援をしてくれているんですけども、それをインターネットで見た朝倉中学校の生徒が 1 人来て、昨年から 1 年間ニュージーランドへ行って、この夏休みに帰ってきています。このように、野球それからそれ以外の魅力を求めて来たという生徒はいました。</p>
八田委員	<p>橿原では、保・幼・小中と一緒に一貫教育ということで、外部からも若干は入ってくるんですけども、かなり閉じた中での取組になっています。そこで学力はある程度、特に D 層を減らしていくような活動というのは、そこそこ成果は上がっていると理解していいのでしょうか。</p>
高橋校長	<p>非常に幅広い学校です。いわゆる A 層、それから A、B、C、D ということになれば、まんべんなくおります。本校の場合、さらに別の S まで調べるテストでは S 層に生徒もおりまして、そういう面でも本当に幅広い関係があって、パーセントで言うと随分 D はいますけども、下の層の指導も十分できていると思っていますし、さらに上を伸ばさないといけないという信念も果たせていると思っています。そのために、アダプティブラーニングというふうに書いていますけども、いわゆる教科別の到達状況テストというのをやりまして、その中で課題がある生徒については、それを数学に限ってですけども、本年からやろうということで、それを中高で共通してやるということ今年から取組にしています。これは D 3 層を回復したいと思っています。</p>
八田委員	<p>高校に上がってからの D 層対策というよりは、中学から高校に上がる前の段階までで、一貫で取り組むことによってその D 層が少なくできるとか、そういう実績はあるのでしょうか。</p>
高橋校長	<p>今、まさしくそれに取り組もうとしているところで、今年、来年に向けてそのようなテストをしながら、実践を行っていきたいと思っています。</p>
伊藤教育長	<p>そのほか、ございせんか。よろしいですか。どうもありがとうございました。次、四万十高校の山本校長、お願いいたします。</p>
四万十高校山本校長	<p>どうか宜しくお願いいたします。それでは、四万十高校の魅力化と生徒数確保に向けた振興策について、配付済み資料の 8 ページになりますが、この内容を基に説明及び提案や要望を含めてさせていただきます。</p> <p>まず 1 の生徒数についてですが、ここでは振興策の前提となる生徒数の状況と数値目標についてご説明します。(1)の①にありますように、本校は本年度、全</p>

校生徒が 50 名となっています。また、その内訳は連携中学校から 40 名、地域外の中学校から 10 名となっております。

(1) の③をご覧ください。連携中学校の今後の卒業予定者の推計です。平成 30 年度は 49 人となっておりますけれども、平成 31 年度 34 人、平成 32 年度 33 人、平成 33 年度以降は 20 人台で推移するとされています。そのことを受けた本校への今後の入学予定者数につきましては、高等学校課の推計を④に記載していますが、平成 31 年度 22 人、平成 32 年度 16 人、平成 33 年度 14 人、平成 34 年度以降は 10 人前後で推移するという厳しい状況が示されています。

そのため、(2) でお示ししましたように、生徒たちが切磋琢磨して成長できる教育環境を維持するための入学生確保の数値目標としましては、連携中学校からの入学者を卒業生の 80%以上、地域外からの入学者を毎年 6～7 名として平成 33 年度までは 25 人以上、平成 34 年度以降も 20 人以上の安定確保を実現可能な目標として、やるべきことをしっかりやって、次に記載しています 2 の振興策に取り組んでいく所存です。

まず振興策につきましてですが、それには三つあると思います。まずは「学校の魅力化」、それから県外受け入れも含めまして「教育体制の充実」、そして「PR と各校の連携」、そういったものがあると考えます。

まず一つ目の本校の魅力化につきましては、これまでの自然環境教育や特に本校の強みである 1 人 1 人の生徒に寄り添った教育をベースに 2 の (1) で具体的な取組を示めさせていただきました。①では、地域の人材育成に関する学習。②では他校と連携した学習を挙げていますが、特に部活動では③、(ア) のソフトボール部や音楽部、これはジャズでございますが、これに一流の指導者を招へいしての技術指導を行い、全国レベルの大会での優勝を目指す取組を大きな柱として、地域内外の小中学生に広く PR し、本校の認知度を高めて入学生確保につなげたいと考えています。

振興策の二つ目としまして、(2) には教育体制の充実に向けてということで挙げてあります。先ほど窪川高校の説明の中でもございましたが、①の地域の児童生徒の育成に向けた「四万十町教育振興基本計画」に関わりますが、「四万十町児童・生徒育成プラン(仮)」策定によるキャリア教育。②の中山間地域の高校でも市内校と同じレベルの教育と進路を保障するための ICT の活用。それから、③の多様な生徒を受け入れるための体制づくりのために、専属の生活支援コーディネーター等の配置も必要と考えております。

最後に、振興策の三つ目として PR と各校の連携ですが、これまで全国募集を行ってきています本校においても、それを見据えた PR がなかなかできていなかったように思います。そのため、小規模校単独の取組にも限界があることから、小規模校である各校が連携して知恵を出し合い、魅力化と教育環境の充実に取り組む、さらにその内容を広く小中学生やその保護者に効果的に伝えることがとても重要だと考えます。それで、(3) に①で「県内小規模高等学校振興会議(仮)」の設置を、②には魅力化・PR コーディネーターの設置を、③には県内外への情報発信の早急な仕組みづくりにつきまして、できないものかと提案させていただきたいと思っております。

また、3 のその他に挙げました文部科学省のモデル事業につきましても、活用ができればと考えております。そういったことで、きちんとした取組を行って、今後の学校経営に取り組んでいきたいと思っております。以上、振興策の概要について本校の説明とさせていただきます。ありがとうございました。

伊藤教育長	<p>ありがとうございました。そうしましたら、ただ今の説明につきまして、ご質問等をお願いいたします。</p>
八田委員	<p>(2)の③の生活支援コーディネーターというところですけど、これは新たに何かどなたかを確保するということですか。</p>
山本校長	<p>特別な支援が必要な生徒に対応する特別支援教育学校コーディネーターという者は、養護教諭等に指名はしておりますけれども、県外から本校に来るにあたって、自然環境を学びたいという意欲的な場合と、あるいは県内外を含めましてその学校ではやっていけないという生徒さんも考えられます。そういったことで、地域の子どもも含めて、なかなか生活面への保護者の支援が少し足りないとか、いろんな生徒さんがおります。そういった全てを受け入れた中で、夢と希望を持たせて卒業させていくためには、生活基盤をしっかりと整えてやる必要があると考えております。そういったことで、提案させていただきました。</p>
八田委員	<p>これは学校として、新たな人材を確保したいということ。</p>
山本校長	<p>そうです。教員以外ということです。</p>
八田委員	<p>教員以外。寮そのものよりも多分、こちらの方が重要だと思うので、安心して子どもを送り出すという立場からすると、すごく大事だと思います。 もう一つの3の②の魅力化・PRコーディネーターっていうのは、これは地域おこしコーディネーター協力隊の方をお願いするということでしょうか。</p>
山本校長	<p>それも含めてですけど、これもやはりお願いする「人」によります。どういった方がいるかということで、地域おこし協力隊でなくても、Iターンで来られている方とか、いろんな方がいらっしゃると思います。要はその「人」になってきますので、なかなか難しいところもございますが、外部から見て四万十高校の魅力がこんなところにあるんじゃないとか、PR方法はこうすればいいんじゃないとか、あるいは他の小規模校を集めてこんな企画をして都会にPRしていけばいいんじゃないとか、そういった提案、企画なんかも引き受けていただきたいと思っております。一緒に考えていきたいと思っております。</p>
平田委員	<p>少し質問ですが、8ページ2(1)の①ですね、やはり地元の高等学校へ行って、地域の産業振興に関わる人材育成を目指し、ということが大事だと。それで教育内容の見直しに取り組むと書かれておりますけど、(ウ)については何かイメージ掴めますけど、(ア)(イ)っていったら職業的にはどんな人材を育成しようとお考えですか。</p>
山本校長	<p>これまでの自然環境コースでございましたら、高校で取れる資格もございませうが、大学に行って取らなければ企業等でそういった資格を活用した就職にはなかなかつながっておりませんが、本校自然環境コースの中には、農業とか林業とかそういった学習をするところがございます。今後、そういった農業、林業の面で働くにあたって、環境というものを非常に大事にする、そういった人材を考えて</p>

中橋委員	<p>おります。(イ)につきましては、地域、四万十町でいろんな産物をそのまま売ったり、加工して販売したりということで、四万十粟とかいろいろやっておりますが、そういったところで、地域のものを利用した起業をしてくれる生徒を、たとえば 10 年に一人でも起業してくれれば、そこから雇用が生まれると考えております。そういった意味で、そこに記載させていただいています。</p> <p>8 ページで、現状として連携中学校の平成 33 年以降の卒業予定者が 20 人以内で推移するという統計上の数字があって、一方、その数値目標として平成 34 年度以降入学者 20 人以上を目標に取り組みむということだと、ほぼ全入、全員が入ることを目標にしなければいけないという大変厳しい状況だとは思いますが。もちろん県外からの地域外からという人数もあるんでしょう、そこは少ない数字だと思いますので、ほぼ地域から全入を目指さないと、今のこの計画っていうのは成り立たなくなってくるのかなと思うんですが、その辺り、実際可能だという感触はあるんでしょうか。</p>
山本校長	<p>連携中学校の卒業予定者数は、今年 49 名と多いんですけども、昨年だとやはり 30 名台ということで、例えば本校の体験入学につきまして、それまで希望者だけが受けておりましたけれども、今年は各校連携中学校に全員来させてほしいということで了解を得ています。そういったことでも、本校の PR を続けていくわけですけども、去年から小学校区にも説明に行っておりまして、中学に上がる段階までで小学校の保護者等にも本校の特色を PR しておるところです。それで、厳しい数字、80% と言えば大きい数字になりますけれども、例えば平成 34 年度以降、10 人前後で推移するとなっておりますが、これは県の高等学校課の推計でありまして、③では先ほどおっしゃっていただきましたように、卒業生が 20 人ぐらいで推移するとしたら 8 割として 16 人、これに加えて寮生は定員が 20 名ですので、三学年に分けて考えると一学年 6～7 名といった数で、合計で何とか 20 名以上を確保したいと考えて取り組んでいるところです。</p>
伊藤教育長	<p>ほか、よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。 そうしましたら、次は中村高校西土佐分校の上岡校長、お願いします。</p>
中村高校 西土佐分校 上岡校長	<p>資料 10 ページですけども、今、生徒は 30 名しかいません。ですが、少なくとも元気があって西土佐地域の方から応援してもらえる、そういう学校になっていると思います。</p> <p>資料の左端、点線で困っておりますのが、今、学校で取り組んでいることで、部活動はカヌーしかしておりません。以前は他にもありましたが、なぜカヌーかと言いますと、インターハイに出場する近道であると。県内に 5 校しかありませんので、そこで優勝すればインターハイに出られると。生徒 30 名のうち 8 人がカヌー部です。その下、平成 29、8 分の 7 とありますが、カヌーは 9 種目ありまして、昨年度 8 種目に出場し 7 種目で優勝して、括弧の中の 10 人がインターハイに出ました。今年は 4 種目に出て 3 種目で優勝して、3 人がインターハイに出ました。JWK というのは女子 2 人乗りカヤックで、これは 2 年連続で四国大会で優勝しています。今年はインターハイの決勝に出したかったんですが、準決勝で転覆をしてしまいまして、残念ながら決勝までは残りませんでした。</p> <p>ラポールというのは 10 人で活動しています。活動 5 年目になりました。地域</p>



を笑顔にということで、生徒たちがいろいろなところへ出向いています。年間約40回ぐらい、ほぼ依頼があって、長い間続けているから来てください、ということで活動しています。以前は小学校で学習支援をしていましたが、今年は生徒が学習支援ができるレベルが少し難しくなりました、学習支援はせずにいろんな活動をしています。

「分校農園大地の恵み」というのを申しますのは、近くの畑を近所の農家の方々にお借りしまして、農作物を栽培しています。小学生とそれから産業支援の方とそういう人と一緒に作業をしています。最初は、明日収穫できるというところに夜中に全て食べられてしまう。獣害がある。網で囲みました。それで大丈夫だろうと思ったらやはり食べられてしまう。なぜかという鳥が来る。それを地域の方が柱を立てて網を張って鳥を防いでくれました。今年はもう間もなく実りというときに、台風が来て浸かってしましまして、地面の土の中のものはまだ生き残ってましたので、小学生と一緒に収穫をしました。「発掘・発展にしとさ」というのが、総合的な学習の時間を使って道の駅「よって西土佐」とか、近くの牧場と一緒に活動をしています。

活性化策として、生徒30人でこれだけの活動をします、もうそれでほぼ一杯です。ではもう小学校、中学校とカヌークラブをつくろうとか、ラポールジュニアと言って、中学校にもラポールの中学生版をつくってやってみようとか中学校へも話をかけていますが、まだなかなかそこまで動いていません。

地域外への広報も、四万十市は枚方市と姉妹都市ですけども、そこへ行ったりとか、高知市の学校に地区として広報したい。ただ、本来の幡多地域も公募をかけようと思うんですが、少ない生徒数の取り合いになってしまいますので、少しかけにくいなということは実は本音です。寮と若者住宅ですが、寮は軽自動車が入る道をしばらく進んで、もうここから道がないというところに寮があります。この寮を見ると「ここで生活するのかな」というところに、寮があります。若者住宅は四万十川沿いにありまして、四万十市がつくっております。

次に地域の担い手としたら、ホームステイとかファームステイ、そこで動ける高校生が外から来る人とともに、高齢者の方と一緒に生活をして、活動するというようなことができれば、卒業後も帰らずに地域にいてくれると思います。結局高校で3年だけ預かって、帰られたら意味がないので、卒業後彼らもまた帰って来てくれる子どもたちが育っていれば、地域のためになるというふうに考えて、次に話をするとしたらこういうことかと思えます。

それから大きな課題が、国公立大学にこのところ行ってないので、何とか大学に国公立に行かせたいということで、「よし！大学行こう」ということで、特に国立大学への進学を県内の大学とコラボしながらできたらと思えます。

難しいことだろうと思うんですけど、例えば中山間で将来、地域に絶対残るといふ子どもたちを県内の大学がある程度受け入れる、ということがあれば、とてもいい生徒が今もいますので、できたらと思っております。

下に小さい字で、「よし！甲子園行こう。」と書いてありますが、うちは野球では甲子園には行けませんので、いろんな甲子園がありますので、学校に分校チームをつくって出られたら何か楽しいんじゃないかと考えております。

伊藤教育長

ありがとうございました。そうしましたら、ただ今のご説明につきまして、ご質問、ご意見等伺えましたら、お願いをいたします。

八田委員	分校であるということが強みとして、本校との連携とか本校との交流というのは具体的には何かありますか。
上岡校長	ラポールと中村高校の本校の書道部は、一緒に書道パフォーマンスをしながらダンスをすとか歌を歌うというようなことをやったりすることはあるんですけども、なかなか学力の差があるとか、そういう方面系というのはしてないのが実情です。
八田委員	西土佐中学校から西土佐分校に行く生徒以外は、主にどこへ行くんですか。
上岡校長	愛媛県の高校に行ったり、あとは幡多農業、宿毛工業など専門高校が多くいます。高知市内にそれほど行っているわけでもないですし、本校にも2、3人しか来ませんので、資格を取るために必要な高校という方が多いです。
八田委員	それに何かこう、もちろん実業高校ではないので難しいかもしれませんが、何かそれに対応するようなことは可能性はあるんですか。
上岡校長	分校に来て大学に行けるよとか、就職率は高いですので、いろんな活動ができますよというふうにアピールをしながらと思います。農業、工業などの専門高校もかなり活動をしていますので、専門性という部分ではやっぱりかなわないところがありますけれども、地域とのつながりは強いよということ。それからカヌーに来ればインターハイに行けるということは強みとしてはあります。
伊藤教育長	そのほか、ございませんでしょうか。よろしいですか。どうもありがとうございます。そうしましたら、次は清水高校の益永校長さん、お願いいたします。
清水高校 益永校長	<p>どうぞよろしくお願いいたします。資料11ページに1枚でまとめてきました。</p> <p>まず、清水高校の現状を言いますと、今年は30数名の入学で4割を切っております。それから県下でも珍しいと思いますが、5年前に清水の中学校が統合して、土佐清水市内には1校しか中学校が存在しないわけですけど、そのときから清水高校は99%、ほぼ全員が清水中学校の入学者ということで、1中1高ということ体制で来ております。</p> <p>それから、「後期再編計画」の中に清水高校の高台移転ということで、これから5年、6年の間に高校自体が大きく変化していくという現状があります。そこで中山間地域にある学校をどう魅力化していくかということで、会を設けてきました。その中で出てきた提言が三つあります。</p> <p>まず提言1として、ICTを活用した進路指導と進路希望の実現がありますが、現在でもスタディサプリなどICTを使って学力向上を目指しておるわけですけど、当然、これから先もタブレットや、それからここには書いておりませんが、遠隔授業などのそういった情報機器を使っての学力向上は当然、進めていきたいと思っています。</p> <p>その中でどうしてもマンパワーというものも必要であろうということで、例えば③には学びの支援員について書いておりますが、学習支援員の活用を拡充していきたい。現在、D3層は清水高校においては、基本的には減少傾向にあります。これはその学習支援員の制度を使わせていただき、それから各先生方も授業改善</p>

をして、生徒に表れてきていると思います。

しかし、学力向上はいわゆる基礎的な生徒たちの向上だけではなく、やはり難関校の進学への希望も当然、叶えさせていかなければならない。これは小規模校の校長ならば誰もが経験していることかもしれませんが、生徒の授業の希望が少人数、具体的には例えば「物理」とか、いわゆる進学用の「数学Ⅲ」とか、そういった授業の生徒の希望が1名とか2名ならば、講座が開設できない。そのことによって教員数が減っていくと。理科の先生が2名しかいない、下手したら1名しかいないという状況の中で物理、化学、生物をどうやって教えるのか。進学に特化するような授業をどうやって教えるのか、という悲哀を感じた校長先生はたくさんいると思います。もし講座が開けないとなるならば、私たちは指をくわえてただ見ているだけ。大きい学校の生徒を見ているだけということになってきます。

そこで、②にあります、広域の担当教員、指導体制を構築してはどうか。つまり、例えば幡多地域であるならば、大きな学校の特定の教科の先生に、清水高校に週1回、2回、昼から来ていただいて、例えば物理の授業を担当してもらう。そういった指導体制が整えば、この学校では授業の進学指導の体制は整えませんが、というような弊害はなくすることができるのではないか。そのことによって、中学生、それから保護者に対して、清水高校でもきちっと進学指導はできますよというPRができると考えています。ただ、これにもデメリットとか、費用面で大きな壁もあるかもしれませんが、こういった体制をぜひ整えてもらいたいと考えております。

提言2として、他校との差別化を考えております。地元の人材育成のために、小中高一貫の学習プログラムを開発していこうと考えています。現在、小中では連携を持ってこういった地域課題のプログラムをやっておりますが、どうしても高校に入ってきたらぷつぷつ切れてしまうという状況があります。それを失くすために、例えば防災課題解決、それから特産品など、そういったものを中心に地域学習プログラムを構築していこうと考えています。今年から探究の時間を使って学年別にテーマを決めて、この地域学習について新たな取組も始めておりますし、それから清水では今、ジオパークや新しい海洋館の建築の計画もありますので、そういったところに研究とかPRを兼ねた学生の参加など、当然考えられると思います。

提言3ですが、これも他校との差別化ですが、部活動のことを出させてもらっています。現在、本校では20の部活動がありますが、生徒数に対して非常に多いです。過去の部活動がそのまま残っているという状況です。実は中学校も1校になりましたが、生徒数も減っていて、部活動の精選が必要だという同じような悩みを抱えています。高台移転を契機に、多分すぐ近くに中高が集まりますので、それを機会に中高で部活動を精選して、中学校でやった部活動が高校でもできると。現状でいくと、清水高校には部活動がないから他に行く、という現状もありますので、部活動を統一化していきたいという希望もあります。それから特殊バージョンの部活動、サーフィンとかフィッシング、スキューバダイビング、それからドローンを活用した部活動、そういったものも視野に入れて考えていきたいと思います。

それから、これはもう何十年も続いておりますが、ジョン万次郎の関係でアメリカのフェアヘーブーンへの留学制度を清水高校では行っておりますが、それをさらに拡大したいと考えています。10日間のホームステイではなく、例えば夏休み

	<p>のサマースクールとかいうものを利用しながら、こういった留学制度の拡充を進めていきたいと思います。</p> <p>最後に、例えば進学、大学、短大、専門学校等を希望する生徒に対しては、土佐清水市もそういう就学に対する支援を整えてくれていますので、全体では応援してくださっている機運があります。そういったところもぜひ地域にPRしていきたいと考えています。以上です。</p>
伊藤教育長	<p>ありがとうございました。ご意見等ありましたら、お願いします。</p>
八田委員	<p>提言1の②で広域担当指導体制というのは、非常に魅力的に感じていて、生徒が高校が少なくなって移動しなきゃいけないぐらいだったら、先生が移動する方がはるかに僕は合理的だと思うんですね。ただ、今まで多分そういうのは実際ほとんどないと思うので、むしろ事務局に聞きたいんですけど、こういうものを実現しようと思ったら、どういう難しさとか課題があるのか。もちろん、先生方にとっては今まで経験がないので、そんな地方巡業みたいなことできるかって思うかもしれないけども、何か曜日を決めて広域で教員が担当するっていうことは現実的には無理なんじゃないかな。</p>
竹崎課長	<p>現在も講師の先生方の中で複数校を掛け持ちで担当しているという先生はございますが、正教員の場合は、例えば中高連携の学校で中学校と高校を行き来しているというようなケースはございます。制度上は可能かとは思いますが、ただその移動時間でありまして、時間ロスの部分もございますので、そういったところをしっかりと整理していかないといけないとは思っております。</p>
八田委員	<p>では、不可能なことではないということで、制度をしっかりとつくれば、できないことではないと。</p>
竹崎課長	<p>はい。</p>
益永校長	<p>例えばICTを活用したものであれば、遠隔授業もあります。それはそれで非常に準備なんかも時間がかかるものだと思います。それと同時に、こういった指導体制もできないかなと。中高連携があるなら、高高連携もあってもいいんじゃないかという形です。確かに壁は高いかもしれませんが、ぜひご検討の方をお願いします。</p>
伊藤教育長	<p>そのほか、ございますか。よろしいですか。どうもありがとうございました。そうしましたら、室戸高校、廣瀬校長、お願いいたします。</p>
室戸高校 廣瀬校長	<p>12ページにワンペーパーでまとめさせていただきました。本年度ですが、入学生が20名ということで非常に少なく、大変ご心配をおかけしたところです。来年度以降はどうしていくのかということで、室戸市とも一緒に考えていこうと、現在、「室戸高校魅力化会」を開催しまして、今、4回目をやっておりますけれども、いろいろとご意見をいただきながら一緒に考えさせていただいているところです。</p> <p>このペーパーの1番上のところに、生徒の充足状況ということで、これからの</p>

5年間の進捗状況を管理する表となります。本校はとにかく生徒数を増やしていくことを1番の目標にしてやっけていこうと現在取り組んでおります。そのときに、室戸市内には五つの中学校がありますけども、その中学校からいかに生徒を集めるか。それと同時に、県外からあるいは室戸市外からどれだけ集めてくるのかと、この2点で対応していこうということを考えております。

したがいまして、達成目標の方には生徒数全体の数と、それから室戸市内の数ということで、そこにこれだけの人数になるだろうという予測の数を入れさせていただいて、達成目標という形で書かせてもらいました。平成30年度のところを見ていただくと、当初43人くらい来る達成目標を持っていましたけれども、実は最終的には20名しか来なかったということです。この理由はいろいろありますけれども、当然、今年以降もそれに引きずられる形はあります。けれども、もう昔はというか、そんなことを言っても始まりませんので、新たな考えでもう一回見直そうじゃないかということで、室戸市と一緒に取り組んでいるというのが現状です。

この10年間ぐらいで、室戸市の五つの中学校からどれだけ生徒が来ていたかを確認しましたところ、これまでで最高で52%、半分少し来たのが最高です。これを何とか52%を超える数を目指してやれないかということで、中学校の先生方とも話をしまして、現在いろんな取組をしているというところなんです。

最初は6割ぐらい何とかならないのかと。そうすると1番近くの室戸中学校から8割ぐらい来ないと多分無理な数ということになっています。そういう話も、もう数も全部出して、校長先生方と話をしました。けれどもやはり厳しいということもございまして、6割、なんとか6割を目指して室戸中学校に頑張ってもらえないかと話をしていたなかで、そしたら今室戸高校が取り組んでいることをもっと宣伝したほうがいいよ、ということになりました。現在、室戸中学校、それから小学校の方に、中学校の段階でかなり外に出て行っていますので、小学生にも話をしてくれということで、取組をしているところなんです。現在、かなりまだ厳しいです。去年20%まで落ち込みましたので、現在のところまだ4割いけばいいかなというぐらいの数しか今のところ確保できていません。これを何とか、一日体験入学等もありますので、それから部活動の方にもかなり足を運びまして、一緒にやろうということで、何とか5割は最低でも超えなきゃいけないということで取り組んでいるところなんです。

それから、県外の方は、女子硬式野球部を中心に何とか確保したいと現在取り組んでいますけれども、非常にこれも厳しい状況になっております。女子野球は最近人気が出始めまして、今各県に1校ぐらいずつ出来つつあります。四国は本校だけでしたけれども、四国にも新田高校、それから中央高校にもできたということもあって、県外とも争うと。昨年状況も、実は本校へ来るはずというか、この6月ぐらいの段階では室戸高校へという話があったのですが、ぎりぎりの1月、2月でソフトボールにかなり流れたということがございまして、県内ではソフトボールとの取り合いということもあります。しかも、私立校との取り合いということもあって、県外の生徒をいかに巻き込むかということで、本校の公立高校ならではの魅力というものを全面に出してやっけていきたいと思っております。

公立高校ですので、スポーツだけではなく、やはり勉強を重点的にやる、学力の定着と進路保障、これは絶対に本校はやっけていきますよ、ということで、それを前面に出しながら取り組んでいきたいと考えています。先ほどから、D3層という話が出ますけども、D3については半減は約束したいと思っております。それから

Aゾーン、Bゾーン、これも倍増させるということで、全教職員の方に話をしまして、現在取り組んでいるところです。

対策にいろいろと書かせてもらいましたけれども、特に女子硬式野球部の支援には、室戸市でかなり支援をしていただいています。年間でもかなりの金額、ご支援を補助金等でいただいております。さらに、クラウドファンディングをしながら全国に声をかけていかないかということで、地域のエムズホープという女子野球部を創立させたときのメンバーが入ってくれまして、現在取り組んでいるところです。これから全国に呼び掛けて進めていきたいと思っております。

ジオパークにつきましては、8月の初めにプレゼンしまして、日本ジオパークの再認定審査、9月に結果が出ます。それを受けて、来年度は世界ジオパークの認定審査もあるということで、そちらも併せて声を掛けていければということで、部活動と、そしてジオパーク、これらを中心にこれからやっていければと考えております。

サッカーについて少し触れておりますけれども、中高の連携の部分で部活動を考えています。勉強とかいろんな学校のシステム、これについては今、宣伝をしていますけれども、やはり一定の数を確保するためには、大きい団体でやる部活動を進めていきたいと思っております。女子野球もその一つですけれども、男子につきましては現在バスケットボールが室戸中学校では非常に多いということで、そこへ焦点を当てたいということと、それからもう一つはサッカーが室戸中学校に室戸市の生徒たちが集まって、サッカー部を創設しました。今年ようやくできたので、その生徒たちが他へ行かないように高校でも育てたいということで、現在、高校の教員を中学の指導にすでに行かせております。中高の連携という形で放課後の時間の空いたところで行くということで、一緒に取り組んでいこうという動きです。

何とかこの男子はサッカー、女子は野球、そしてバスケットボールは男女両方ありますが、そういった集団でやるスポーツを中心にやらないかん。これまではバドミントンとか卓球とかもある程度、土台がありますので、それは継続できるような形で支援はしていきますけれども、大きい部活動、集団でやる部活動への支援が、今後必要になってくるだろうと思っております。

女子サッカーも少し触れさせてもらっていますが、まずは男子ということになっていますが、すでに女子サッカーも県内というより県外、徳島県が非常に女子サッカーが盛んですので、そちらからうちの方へ来てもらえないかと。実はバスケットボールの強い子たちが全部、徳島に流れておりまして、逆にこっちへも、お互いできるものは、ということでできないかと考えています。これにつきましては、次の段階ということになります。男子、女子両方できるようなシステムが取れたらいいと思っております。とにかく部活動をこれから力を注ぎながらやっていきたい。

地域貢献が室戸高校で1番いいところだと思っておりますので、人とのつながりを大切にしながら、当然、室戸市内も大切ですが、県外の方にも話ができるような形で持っていけたらと思ひまして、世界ユネスコに認定してもらいながら、そういった学校との交流も持つような体制も取っていけるように、今、取り組んでいるところでございます。以上です。

伊藤教育長

ありがとうございました。そうしましたら、ただ今のご説明につきまして、ご質問等をお願いします。

木村委員	<p>部活動を充実させて生徒数を集めたいという思いは十分、分かるんですけども、今110名から120名っていうと、あれもこれもやると結局どれもかまが力が落ちてしまうと。むしろ何かの部に集中した方がいい。むしろそれによって人を集めるということになりやせんろうかと、私なんかは思うんですけど、そのあたりはいかがですか。</p>
廣瀬校長	<p>当然、十分そういうことも考えさせてもらいまして、本校の教員とも話をして、やはり女子野球、これは地域との連携も取れておりますので、そこを中心にやっていきたいと思っております。ただ、野球だけではバランスが少し取れないということもあって、いろんな部活が交流しながらやることは一つのいい面もつくれると思っておりますので、何もかにもというのは無理だと思っております。</p> <p>女子は女子野球、男子はサッカーという形で何とかできないかと。野球もやっているんですが、野球を今までやっていた子がサッカーに流れているということもありまして、中学校と連携をとりながら調整を取りたいと思っております。</p>
平田委員	<p>教育内容について少しお聞きしたいんですけど、現在、総合学科で4系列置いていますけど、今の2年生でいいですけど、4系列とその系列、選択しているおおまかな生徒数ですね、校長さんは一定、生徒数を確保する中で、ある年度からはもう1系列減らして3系列にすると。私は地域にさまざまな希望を持った子どもたちがいると思うんですね。増やすだったら理解できるんですけど、3系列、元々全体が増える中で減らそうという構想があるようなんですけど、その辺りを少しご説明していただきたいんですけど。</p>
廣瀬校長	<p>実際のところ、その4系列で希望を取っても授業が成立しない、人数的に実際のところ2人、3人しか講座が集まらなくて授業ができない、というようなケースが出てきております。そうした中で何とか選択授業というような形で残せないかということで今、探っております。実は今年も、実際のところ4系列が3系列になっています。来年度から4系列は3系列にはしませんが、統合というような形でこれまでの商業と工業を一つにして、商工業という形の系列を一つつくりまして、三つの系列というような形にはなっています。選択科目としては全て残させていただくということで、高等学校課の方にも許可を得る形で今、動いておりますので、3系列にはなるけれども選択として残すということで、今までどおりの授業は保障できると考えております。</p>
平田委員	<p>工業系列とビジネス系列は分かりますが、あと二つの系列は何ですか。</p>
廣瀬校長	<p>一つは文理総合ということで、国公立、4年生大学を希望する者の系列を一つつくっております。これが大体、毎年10人~15人ぐらいの数でして、そのうちの半数が国公立に希望する。8割方が国公立を合格しておりますけれども、そういった系列でございます。もう一つが、家庭福祉を中心とする系列です。家庭科と福祉を一つの形にしてしております。</p>
平田委員	<p>40名と1年生が切ったら総合学科をやめて、普通科にするということを少し考えていますけど、そのことの議論を進めていると。それはもう中学校側とか地域の人たちなんかも十分、知ってのことですか。</p>

廣瀬校長	<p>地域への説明というのは、決して十分ではないんですが、開かれた学校づくり、あるいはこの高校の魅力化の会ではこの数を出しまして、実際のところ 40 人をずっと切り続けた場合には、総合学科としての授業というのは非常に難しい、系列に分けての授業というのは難しくなってくるということで、選択科目という形での普通科高校を模索しなければいけないような状況になると考えています。</p>
伊藤教育長	<p>ほかにございませんでしょうか。どうもありがとうございました。 では、佐川高校の谷村校長先生、お願いします。</p>
佐川高校 谷村校長	<p>佐川高校ですけれども、5分程度の説明とお聞きしておりますので、絞って説明をさせていただきます。その絞った内容は、「総合的な学習の時間」の、「いのち輝け～さくら咲くプロジェクト～」の取組でございます。地域定住の意識を醸成させるということで、地元の4町村、佐川町、越知町、仁淀川町、日高村を中心として、地域と連携しながら学習を展開するという内容でございます。</p> <p>今日は4時から本校で、地域に根ざした佐川高校を応援する会ということで、4町村の首長様、それから議長様が参加していただいて、こういった内容につきまして話をさせていただいております。</p> <p>「いのち輝け～さくら咲くプロジェクト～」の学習目標ですけれども、1に書かせていただいております、まず地域定住意識の醸成。それから2番目としまして、社会人基礎力、特に地域を学んだ後、プレゼンテーション力を生徒たちにもつけたいということ。それから三つ目として、地域を自らの言葉で語れるようにしたいというのが学習の目標でございます。</p> <p>1年生につきましては、地域のリソース、資源を知るということで、1学期は4町村の町長、村長様で、一つの町ですけれども、関係者の方に来て説明をしていただいております。2学期になりますと、現地学習ということで、どういったところに行くのかというのは、その次に表にさせていただいております。佐川、仁淀川、越知、日高、それぞれの特徴ある企業等に行くようにしております。</p> <p>それから(2)2年生のテーマは、地域で働くインターンシップを7月終わりに行わせていただきました。それぞれの地域に戻って、地元の企業に参加させていただいております。その際には、マナー講座、アポイントメントの取り方、それから礼状であるとかというような形で進めさせていただきました。この2学期、3学期はその内容につきまして課題研究をまとめ、3年生につなげていくようになっております。</p> <p>3年生のテーマは、地域の未来への提言ということで、これはこれから自分たちが住んできた町村について、こういったことをやったらどうか、という内容になっております。その内容につきましては、14ページ5番になります。総合学習発表会を12月19日に予定しております。3年生各チームのテーマは夏休みが明けて本決まりになります。方向性としてNo.8まで、大体4名もしくは5名のチームでそれぞれ出身の町村を中心に、提言もしくは商品などを考えております。特に今年、佐川町長から期待されているのがNo.6、道の駅佐川。佐川は道の駅がありませんので、どういったものをつくるのかということも生徒さんが考えているようです。</p> <p>少し戻ります、3高大連携になります。このプロジェクトには高知大学の地域協働学部の須藤先生、それから学生さんの参加で研究をさせていただいております。</p>



す。また4になります、学校支援地域本部事業の活用ということで、土佐山アカデミーの佐竹祐次郎様に、地域コーディネーターということで活動していただいております。

これらの内容につきまして、4年目に今年入りました。こういった活動というのは、なかなかすぐにはつながってはいきませんが、少しずつ地域につながってきて、地域の方から「今度はどんな内容ですか」と注目もされてきております。地域全体に本校の取組が認知されつつあるということを感じております。越知町の岡林農園さん、または仁淀川町の池川木材さんからは、求人等もいただいたり就職をしたりという形で、今まであまりなかった地域への就職ができつつあると聞いております。

プロジェクトそのものは、仲間づくりの一環としています。それぞれのグループでチームワークもできており、アクティブラーニングの基本的な資質もこのプロジェクトを通して身に付いてきているという成果を感じております。

課題がありますが、課題の克服も兼ね、この研究そのものにタブレットを使って活動したいということです。今考えているのは、社会人の方もこの地域本部事業に入ってくれています。この社会人の方というのは富士通の関係の方なのですが、今富士通がICT開発ということでタブレットの使い方について、いろいろ研究をしてくれています。その関係を使って何とか生徒のこういう研究について、タブレットを使うことができないか、今、話をしております。

2点目としまして、(2)の課題の三つ目に書かせていただいています、高大連携によるプロジェクトの発展があります。地域に入って高知大学地域協働学部の学生さんと佐川高校の生徒のグループ協働で、こういった学習ができないかと、須藤先生と話しております。

最後になりますが、地域コミュニティーをこういった形で勉強しているわけですが、日本だけではなくて世界の地域コミュニティーを勉強できないかということで、考えております。世界を勉強するのに、例えば東京や大阪の大学へ行って勉強するよりも、現地に行って勉強できないかということで、高校時代に1週間、2週間、できれば1カ月ぐらい海外に留学をして、その地域でどういったコミュニティーがあるのかを体験して帰ってきて、それを地域で発表、地元で発表してもらうという方向性も考えております。

佐川高校は、この「さくら咲くプロジェクト」を中心として、魅力ある学校、地域に根ざした学校を目指してやりたいと思っています。いろいろありますけれども、今日はこのプロジェクトに絞って説明をさせていただきました。

木村委員

4町村の地域に根ざした高校という意味合いでの、「さくらプロジェクト」というのを考えましたけれども、異常に越知町からの入学者が少ない。他の学校を見ても、特筆するぐらい越知中学校から佐川高校への入学者が少ないですけど、これについて何か理由の分析とか、今後対策とかということがありましたらお教えいただきたいと思います。

谷村校長

本年度につきましては、越知中学校から2名の入学者しか来ておりません。これはいろんな話を聞きますけれども、はっきり言いまして越知中学校、今、小学校、中学校の学力向上ということでかなり力を入れてきております。その関係から言いますと、佐川高校に行くよりは、ということで高知市内校へ入学する生徒さんが多いということがあります。それから、先ほども他の学校さんでもありま

八田委員	<p>したが、須崎工業であったり、伊野商業であったりという実業高校に行っているという話も聞いております。</p> <p>対応としましては、ちょうどPTA会長様が越知町の方ですので、その地域との連携も取りながら、また越知町長様も個人的にも私よく存じておりますので、今日もその話もさせていただきました。学力向上で進学がきちっとやれるように、ということは話の中でいただいております。</p> <p>その対策としましては、ICTを利用してできれば進学にも強くなる学校、一つの目標としては佐川高校の地元出身のお医者さんが、地元に戻っておじいさん、おばあさんの病気を診るっていうものに、一つ希望としては考えております。</p> <p>地域と一緒に、地域で活躍するような子どもたちを育てるという方向性は、重要なことだとは思いますが、それが成果のところ、中学生向けにも広報冊子を出しておられると。それが、その広報誌というのは中学生にとってどう映っているのか。中学生がどんなふうに魅力を感じるようなものなのかっていうところが少し何か心配なところがありますけど、どうなのでしょう。</p>
谷村校長	<p>4年目に入りますけど、プロジェクトが始まったころに、佐高かわら版ということで、佐川高校を知ってもらおうと。それまではそういった活動はあまりしていなかったと思います。佐川高校では何が行われて、どんなになっているのか、今どういうふうな活動をしているのかということが、地元の中学校、特に佐川中学校では分からなかったというところから、この佐高かわら版で佐川高校で今、こんなことをやっているよ、もしくはプロジェクトの内容ではこういうことをやっています、といった内容を中学校で、また地域の方、それから町村の広報にもこれを出させていただいて、いわば啓発活動の一つということでやらせていただいております。</p>
八田委員	<p>これは4町村の中学生に一斉に配るようなものなんですか。</p>
谷村校長	<p>はい、そうです。予算も組んでやらせてもらっています。中学校などから、これで様子がよく分かりますっていうふうには好評です。</p>
八田委員	<p>結果的に、その佐川中学からの進学が増えてほしいわけですね。けれども、そこにも結びついていないとすると、「確かに佐川高校、地域のために頑張っちゅうね。でも、僕らは行かないよ。」だったら、効果は上がっていないわけで、そこに何か中学生に訴えかけないといけないわけですね。そこを何かもう少し分析して、「じゃあ、佐川高校に行こう」って思わせるようなかわら版にしなきゃいけないっていう話ですね。</p>
谷村校長	<p>その通りでございます。私どもは結局、広報活動をしたから来てくれるんじゃないかと、その写っている生徒さんが後輩なんかに、「本当に楽しいよ。佐川高校に来いや」って言えるような、そういう教育をしながら冊子広報活動というふうに位置付けていきたいと考えております。</p>
伊藤教育長	<p>よろしいでしょうか。ありがとうございました。</p> <p>それでは9校の校長先生の方々、本当にどうも長い間ありがとうございました。</p>

た。また今後、それぞれ事業の整理と言いますか、熟度にもかなり温度差があるものもあったと思いますけれども、これからしっかりやっていくについては、予算的な条件も出てくると思います。多分事務局の方から、それぞれの事業化に向けて具体的に実際にはっきりした効果が期待できるものなのか、そして、それに向けての計画がしっかりとできているか、5W1Hなんかがないと、予算要求も財政課との折衝もなかなか難しくなりますので、そういったお話をさせていただくこととなりますので、またこれから、この計画の策定に向けていろいろとご協力いただくとと思いますが、よろしく願いいたします。本当に今日はありがとうございました。

最後にもう一回、せっかく9名の校長先生いらっしゃいますけど、何かもう一つお聞きしたいというのがありましたら、ここでお受けしたいと思います。

八田委員

本当に先生方、いろいろと厳しい状況の中で工夫されてご提案いただいたので、これからはぜひその勢いで頑張っていただかなきゃいけないと思います。

感想として3点あって、一つは大学進学をちゃんとできるような学力を保証しなきゃいけないと、皆さん考えられています。ただそこで、その地域に残って勉強しようっていう地域で活躍する人材と、大学進学ということを上手く結び付けるのは難しいんじゃないかと危惧します。

だからその地域に残って、その地域を活性化して頑張ろうという子どもたちを育てたときに、その子たちは地域で将来活躍するために大学へ行くんだという、何か大学進学の次がはっきり見えて、それが地域に結びつかないと進学に結びつかないのかなと。もちろん、そのまま進学せずに地域に残って活躍してもいいわけけども、でも一方で大学進学が学校に問われるわけです。進学した次の先に何かあるかっていうところがはっきり見えた進学指導をしなければいけないというところが気になりました。

2点目は、もうその地域で圧倒的なその存在感を出さないと生き残れないんじゃないかと。その地域にはこの高校がどうしても必要なんだ、ということを経験の皆が理解しないといけないのかなと思います。いくつかの学校からお話が合った高大連携ですが、特に高知大学地域協働学部はあちこちに学生が行っています。少ないですけど高知工科大学からも、高知県立大学からも行っています。そういう学生が地域を活性化するために活動しているんだけど、理想を言えば、その学生が入ってくるんだしたら、まず高校に少しお伺い立てるよっていうぐらいの存在感がないといけません。大学生が地域と一生懸命やっているから、そこへ一つ入れてもらおう、では駄目だと思うんですね。

そのためには、多分、高校側が地域のその活性化の活動に主体的に意欲的に、むしろ首を突っ込んで関わっていくようなことを意欲的にやらないと、もう大学生が勝手に来て、大学生が勝手に地域貢献をやって、盛り上げて、ずっと帰っちゃうんですけども、それで終わってしまう。そこを何か必ず高校が関わっていると。当然その地域だからその高校がなけりゃ上手くいかないよね、というような、それぞれの高校によって違うと思いますけれども、そういう存在感をどうやってつくるかということが大事だと思います。

3点目は、中高一貫とか小中高連携の教育の話が出てきて、途中でも申し上げたんですけど、それをちゃんとやるんだしたら、結局その地域で、学力の非常に厳しい子どもたちが高校に上がってくることがまずないようにしないといけません。学力保証って言われて、D層を減らしてくださいって一生懸命言うわけですが

	<p>けれども、D層を減らすべき仕事は実は義務教育側にあつて、義務教育側でもう少しちゃんと勉強させてから高校に来させてくださいって、そこに対しては高校はもっとしっかり提言もするし、協力もしていくと。D層がこの地域からは入ってこない、D層の子はいない、というようなところを目指さないと、結局その補習を一生懸命やりながら、では特色のある教育をできるかって、なかなか大変だと思います。</p> <p>それから県外とか地域外から子どもたちを特色で受け入れよう、例えばカヌーで受け入れよう、としたときに、一つ不安になるところは学力大丈夫なのということです。室戸高校でありましたけど、女子野球に入ってくるときに、私立と違ってうちは公立だから学力大丈夫だって言えるためには、何が必要かって言うと、恐らくその地域から入る子どもたちがそこそこの学力が高いと。それは高校の先生が必死になって補習するから何とかするのはなくって、そもそもその地域から入って来る子どもがある程度学力を持って入って来てくれないと無理だと思うんです。だから、それも本当に地域の課題なんだけれども、地域でちゃんと義務教育の学力をつけて高校に入ってくるっていうことに対して、何か小中高連携で上手く関わっていただけたらいいのかなと思います。</p> <p>本当に大変だというのは皆さん分かりましたので、ぜひ今後とも情報交換させていただいて、頑張っていたきたいと思います。ありがとうございました。</p>
平田委員	<p>あまりこの話が出なかったもので、ここで私がお話をさせていただく方がいいかと思つて手を挙げたんですけど、本日、高知県の中山間地域の振興策ということで、9名の校長さんからお話を聞きましたけど、1カ月ぐらい前になるんでしょうか、報道関係で見ましたけど、文部科学省においては、来年度の概算要求で公立高等学校を核に地域の人材育成をするというモデル事業を実施するということが発表されました。四万十高校が少し書かれておりました。</p> <p>事務局に少し質問なんですけど、高知県としてこのモデル事業へ手を挙げて、この中山間地域の振興策と一緒にやろうという考え方を持っているかどうか、お聞きをしたいと思つております。</p>
伊藤教育長	<p>まさしくそれは、この今回のこの高校再編振興で各校が取り組む事業のためにある事業だと思つております。積極的に人件費なども国の事業で出るということで、全国的に三つの分類に分けて、高校を採択をしていただけたということになります。ですから、今回の高校再編振興計画の内容については、この文部科学省の言うように、全部手を挙げていきたい、一つでも多く取っていきたいと思つています。</p> <p>一つにはその財政的な支援というものもありますけれども、その文部科学省のモデル事業に採択をされて取組をしているということについて言うと、先ほどから話がありましたように、各校のPRを全国的にモデル事業だということでのPRもつながります。今度、総合教育会議の場でもその資料を大きく出して、高校再編振興でその事業を取り出して、ぜひ狙っていくという恰好でやっていきたいと思つておりますので、そこはターゲットを絞って、まずはそこを狙っていくということやってる部分です。</p>
平田委員	<p>自分だけしかイメージを持っていませんでしたけど、教育長さんからそのお話を聞きまして、まさに校長さんのお話を聞いたときに、地元の自治体と企業等々、</p>

伊藤教育長	<p>産業と一緒に推進体制をつくるというお話がありましたので、この事業はぴったりだと思います。ぜひ、多くの県内からの高等学校が手を挙げて、我が校の活性化策をつくりあげていただきたいと思います。たくさんの方を、今無理かも分かりませんが、ぜひ指定を受けて研究を進めていただきたいと思います。ありがとうございました。</p> <p>事務局もそういう形で作業を進めていくと思います。</p> <p>そうしましたら振興計画の部分につきましてはここで終わりたいと思います。</p>
-------	--

## (2) 窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について

伊藤教育長	引き続き窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について議論を、検討をお願いしたいと思います。事務局の方から説明をお願いします。
山岡企画監	<p>窪川高等学校と四万十高等学校の在り方について、資料2～資料4についてご説明をさせていただきます。</p> <p>資料2は、第5回と第6回に四万十町で行われた教育委員会協議会での意見の概要です。まず7月13日の窪川地域での学校関係者からは、町の活性化のシンボルとして両校を存続させてほしい。学校の取組や町営塾により生徒たちが活性化してきた。地域のリーダーとして育つためには地元の高校が重要。町の移住促進施策にとっても学校の在り方が重要。学校、地域、町による連携の取組ができおり、両校が活性化してほしい。地域の核であり、両校の存続を強く願う。高校の魅力をPRする。地域外から来てもらう取組が必要ではないか。地元の高校への進学は経済的にも助かる。距離的要因、地域的要因からすると、統合をすると1+1=1は1以下になるのではないかと。生徒数が少ないと部活動などでデメリットがあるが、一方ではメリットもあるのではないかと。といったような意見がありました。</p> <p>両校の所在地である四万十町からは、町営塾や通学助成や寄宿舎の支援など、教育環境の整備に努めている。各学校で実績をつくり、進学増につながる取組ができないと厳しい。町営塾は地元で学習できる環境をつくり、地域とのつながりを持つためにつくった。平成33年、34年には地域や保護者、町民の皆さんから評価してもらえる実績を出したいといったような意見がございました。</p> <p>傍聴者からは、経済的な問題、環境、家庭環境などの弱い立場にいる子どもたちが高校に行けることの必要性を考えてほしいと意見がございました。</p> <p>教育委員の皆様からは、小中学校と高校の間で進路指導など連携が必要。課題を先送りせず考えていくことが大事。学びのチャンスを残すには、案2。キャンパス制は意見が伺えなかった。四万十町の子どもが窪川高校に進学しないことが1番の問題。新しい高校をつくるぐらいの刷新が必要ではないか。子どもはもっと大人数でやりたいと思っているのではないかと。といった意見がございました。</p> <p>次に7月17日の大正地域での学校関係者からは、知事には町営塾にも来ていただき、また中山間地域の学校を残すべきだといった答弁もされた。議会では寮費への補助が可決した。これから取組の成果が表れるのではないかと。資格の取得が魅力化につながる。ジャズや自然環境コース、部活動の取組の充実や中学校との連携が重要。小中学校、地域への高校の情報発信が大事。少人数指導により子どもが伸びている。案1の存続が望ましいが、教育の質の保障を考えると案2の</p>

キャンパス制もあると思う。四万十町の面積は淡路島より広い。全国からどう生徒を集めるか。公設塾、ソフトボール、ジャズの3本柱にドローンや研究学習も加えたい。経済面、通学面からは学ぶ場所の存在は前提。中学校でジャズをやった生徒が高校でもできるので、たくさん今年は進学したといった意見がございました。

四万十町からは、町は広いので地元で高校があることが大切。町営塾の取組もアピールして、地元中学校からの進学率を50%以上に高めたい。通塾の不便を解消していきたい。地元高校への財政支援は重要な課題と意見がございました。

傍聴者からは、生徒数が20人を下回らないよう頑張ってきたが、生徒数、子どもの数が少なく厳しい。コース制では弱いので、科にすることが必要ではないか。中学校でやっていることが高校でもできるということは大きい、といった意見がございました。

委員の皆様からは、カヌーのインストラクターやネイチャーガイドなど、卒業後、町で仕事ができることはアピールになる。商工会との連携も大事。自然環境を学ぶ上で、指導教員の確保も大事ではないか。ソフトボールやジャズ以外にも部活動を通じた中高連携の取組がほしい。持続的に学校が残っていくためにはどうすればいいのか。卒業後も地域に残り、四万十町が活気づく取組ができればよい。広い面積を考えると地域に残すことも重要だが、中学校卒業生全員が入学しても人数が厳しく、案2のキャンパス制を強く感じる。四万十町の子どものことを考えて意見を述べたいといった意見がございました。そして各地域に学校が必要という意見が出されており、案1か案2で議論を重ねたいという取りまとめで終了いたしました。

続きまして、資料3をご覧ください。資料3は、案1、両校の存続と案2、キャンパス制について学級数を変えて一つの例として作成した比較表です。ここにあります学級数は、存続とキャンパス制の比較のために便宜上1学級、2学級と仮に置いているだけです。特にこれで1学級になるとか、2学級のままとか、そういった趣旨のものではございませんので、ご留意いただきたいと思います。

表にありますとおり、上①は両校存続で窪川高等学校2学級、四万十高等学校2学級の場合で現状のとおりです。窪川高等学校は普通科で2年次から地域リーダー養成コースと大学進学コースに分かれます。四万十高等学校では普通科で1年次から普通コースと自然環境コースに分かれます。

一つ右の②は、窪川高校2学級、四万十高等学校1学級の場合です。四万十高等学校が1学級になると、1年次の入学段階から普通コースと自然環境コースに分けることができないので、2年次からのコース選択としています。

一つ右の③は、窪川キャンパス（仮称）2学級、四万十キャンパス（仮称）2学級の場合です。この例としては、両キャンパスともに2年次よりコース選択をすることにしています。キャンパス間で普通科、産業系専門学科などの学科を受けることもできますが、この例では同じ教育課程にしています。ただ、2年次からのコース制の場合、入学者数によっては四万十キャンパスで2学級規模の維持が難しくなることも考えられます。

1番右の④は、窪川キャンパス2学級、四万十キャンパス1学級の場合です。1学級の場合でも2年次からコース制を取ることができるのは②と同じです。

その下の欄に窪川、四万十のキャンパス制の考え方を記載しています。仮にキャンパス制を導入した場合、同一の教育課程、学校行事とする。学校の教育目標や教育活動などを共有する。時間割の一部、共有化を図ることが考えられます。

両キャンパス間の距離が 20 キロメートル以上離れており、時間にして片道 30 分、往復で 1 時間かかります。生徒が移動して合同授業を行おうとした場合、1 時間以上のロスが発生することを考えますと、ICT を使った遠隔授業を除き、授業の合同化は難しいと考えられます。部活動の合同練習は同じく移動時間のことがありますので、平日は難しいですが、土日は合同練習ができるのではないかと考えています。

一方、学校行事の合同実施はできると思います。社会性の育成や生徒間の切磋琢磨といったところは、授業の合同化の部分よりはむしろ、部活動の合同練習や学校行事の合同実施で確保することになると思います。

その左の欄には、平成 30 年度の窪川高等学校と四万十高等学校の各学年、コースごとの生徒数を掲載しています。窪川高等学校は 7 割が地域リーダー養成コース、四万十高等学校は 7 割以上が普通科となっています。

キャンパス制の移動手段につきましては、バスの借上げやバスの購入などが必要になると思います。移動にあたって交通安全の確保策も検討が必要となってきます。

管理職の配置につきましては、案 1 の場合にはそれぞれが独立した高校ですので、校長、教頭、事務長がいますが、キャンパス校は一つの学校なので校長先生、事務長はそれぞれ 1 人となります。

授業につきましては、窪川高等学校と四万十高等学校の場合、時間、距離がありますので生徒の移動は行わない、教員の移動は芸術科目を除き、原則として行わないように考えています。ただ、曜日別の勤務などは考えられるのではないかと考えております。なお、左の欄にありますように、窪川高等学校と四万十高等学校は平成 28 年度から遠隔授業を始めており、それをきっかけに両校で校時を合わせています。遠隔授業を行いやすい環境にあります。

部活動については、存続の場合、部活動によっては他校等との合同チームで大会等に出場できますが、原則として全国大会への出場はできないことになっています。一方、キャンパス制の場合は、一つの学校として大会などに出場でき、全国大会への出場もできることになっています。現在の部活動は窪川高等学校は音楽部、バスケットボール、四万十高等学校は家庭科、ソフトボール男子、バレーボール女子が人数が多くなっています。

合同で実施する学校行事につきましては、案 1 では交流行事を実施したり、生徒会の連携を取るといったことになりすけれども、案 2 では式典やクラスマッチ、体育祭、文化祭などが考えられ、例えば体育祭や文化祭を隔年で窪川地域と大正地域で開催することが考えられます。

地域課題等につきましては、両校存続でもキャンパス制でも、現在両校で遠隔授業を実施しております、一方の学校で開講できない科目、教科や科目を授業配信できることになっています。

続きまして、イメージのところをご覧ください。キャンパス制の場合は、複数のキャンパスを持つ一つの学校であります。少し留意点なんですけれども、学校の絵の下に人数を記載していますが、これは平成 30 年度の入学生です。1 番右の④は四万十キャンパス 1 学級という例を載せておりますけれども、これは平成 30 年度 2 コースで入学した生徒を、1 学級にするといった趣旨ではございません。ここは注意をお願いしたいというふうに思います。

比較のところにも書いていますが、キャンパス制の場合、③は 1 学年 4 学級規模の一つの学校としての教員配置。キャンパス制の場合の方は 1 学年 3 学級規模

の一つの学校としての教員配置となりますので、存続の場合と比べますと教員数は少なくなると考えられます。

最後の欄に書いていますけれども、存続の場合は大正、十和地域の生徒だけでは生徒数の確保に人数の限界がありますので、地域未来留学フェスタ、あるいは高知暮らしフェアなどに参加するなど、県外を含め圏域外の生徒の確保が必要になってくると思います。

続きまして、20ページをご覧ください。資料4は「後期実施計画」の最終検討案に対しまして8月20日に四万十町から意見が示されましたので、その内容をご紹介します。

四万十町の二つ目の四角のところ、最終検討案に対する町意見の概要というところをご覧ください。四万十町の町づくりにおいても、高等学校は必要不可欠。7月の教育委員会協議会では両校の存続を望む声が多く示された。町としても町営塾の運営、教育振興会への補助、海外研修など総額5,500万円を支援策に危機感と覚悟を持って取り組んでいるが、開始してまだ1年余りで道半ばである。生徒数を確保するために、地元中学校からの入学者数を増加させるなどの取組が求められ、さらに振興策や地域協働分野も模索中である。「後期実施計画」においては、①案、窪川高等学校と四万十高等学校の維持を希望し、両校のさらなる振興策を最大で支援、推進する。「後期実施計画」期間中の取組を踏まえ、定員充足状況や継続的な教育効果が得られないと判断された場合は、1校への統合もやむを得ないと考える、といったようなものでした。

そしてその下に、今後の町として考えられる振興策を明記しています。生徒募集の強化、町内発信と受け入れ体制の強化、希望進路の実現など、ステップ活動の選定と強化、全国レベルを目標として活性化する。中高連携や町教育ビジョンと連動可能な教育プログラム、高校応援大作戦、町営塾、コーディネーター配置、通学・寮運営支援などの実績づくり。地域との連携強化、県立高等学校と行政や地域との意志共有というものでございました。説明は以上でございます。

伊藤教育長

ただ今、説明がありましたように資料の2、7月に四万十町の現場へ出向きまして意見聴取を行いまして、それまでの議論をふまえて資料3ということで、その案1と案2に絞ってそれぞれメリット、デメリット、特徴なんかを整理をして説明をいただいたところです。

そうした中で、四万十会場での両校の統合は行わない、案1、案2でいくというような説明を、同意を基にして8月20日に資料4のように町として財政的な支援も含め、目一杯対応していくということで、両校をこのまま存続していただきたいとの意見が公式に来た、ということでした。

そうしましたら、それぞれ委員の皆様方に少しご意見をいただこうと思っておりますので、平田委員から順番にご意見をいただきたいと思っております。

平田委員

今回、後期再編振興策ということで協議を進める中で、やはり窪川高等学校と四万十高等学校の在り方は大きな課題だと私自身も考えております。特にこういうメッセージを出すならば、四万十高校におきましては、2学科ある学校で定員も相当割り込んでいくという状況で、子どもたちにとって本来の高等教育ができていないのか、という思いをしております。

今回いろいろな機会に窪川高校区、四万十高校区を回りまして意見を聞かせていただきまして、ほとんどの意見というのは案1が強かったんじゃないかと思っ



ております。一部でキャンパス制もやむを得ないか、という声も聞いた気もしますが、それぞれの地域に、教育委員会をはじめ振興策を考えておられて、このようにしたいんだから、少し再編については検討してほしいという意見があったように思います。

私も、この後期の振興計画が始まった当時から、このことについてさまざまな方々の意見を聞く中で、変わってきたという思いもしておりました。教育においてはその可能性を無視することはできないんじゃないかと。ご意見を聞いたときに、やはり可能性は残しておくべきではないかと最近思い始めました。ただし、生徒数の減少の中で定員状況が一定の基準を満たさないとか、子どもたちの教育効果が上がってない、生徒の視点で学校の教育内容がどうかという点でのチェックをして、最終的な方向性は私としては案1の方向を現在は考えております。

①か②か、それで現状維持の中で、両校が切磋琢磨をしてさまざまな支援を受けながら、存続に向けて取り組んでいただく。しかし、生徒数の維持とかいわゆる教育効果について問題が生じたときには、統合するという書き込みをお願いしたい。その書き込み内容については、今後の中山間地域の高等学校すべてに影響してくると思いますので、そこは慎重に事務局としても検討していただきたいと思います。案2については現在、私としても意見を持っておりまして、案1でどうかということで提案をいたしましたので、この後は語りません。

中橋委員

今回資料を読んで、町からの意見ということで出ていて、簡単に言えば、「今途中だからもう少しやらせてよ」ということなんだと思います。町をあげての支援を考えているところで、地域に行き皆様の共通する話というのは、地域に学校を残してくれ、という話なども伺うなかで、この町からの意見でもかなり背水の陣というものが、相当な覚悟を持って、こういった意見を出されてきたんじゃないかというのを、強く感じるころではあります。

私自身は案2を強く考えていたころではあるんですけども、今回、案1を希望するという明確な町からの意見があって、その後、教育効果が得られないとなったら1校への統合、というふうに、かなり踏み込んだ内容での意見を出されていて、案2という話はないかというのを少し考えているころではあります。

そういうところですので、私は今のところ案1なのかとは思いますが、一方でこの現状というものもある意味考えていかなければいけないところですので、総額5,500万の支援策を考えても、では町としたら何年計画でこういった支援策を考え、今現在、推し進めているのかということをおもいます。

教育効果が得られないと判断された場合というのが、ずるずるもう少しやってくれ、もう少しやってくれみたいなことを、その地域の子どもたちとの教育効果と比較したときに、いつまでもずるずるというわけにはいかないということもあると思いますので、ある程度、少し言葉は適切かどうかは分かりませんが、期限というようなものも「後期実施計画」の中には盛り込んだうえで案1というのが適切なのではないかと思っております。

木村委員

町から出された意見も、先ほど中橋委員もおっしゃりましたが、背水の陣という姿勢はすごくよく分かります。一定期間、つまりは平成35年度ぐらいまでを見越して、一定の成果が上がらなければ1校へ統合する、というある種覚悟だと思っておりますが、私は中山間に学びの場がなくなるということは、できるだけ避けなければならないと思っています。

	<p>かつ、あまり結論を先延ばしにするということも好きではないこともあって、今のここに書かれています町のご意見の振興策案を、別にキャンパス制にしても全部同じようにやっていかないかんことばかりでございますので、この案2でも、十分町の思いを両校の振興に対する思いを十分、吸い込めることじゃないかという気がしております。</p> <p>平成 35 年度ぐらいになって大きな成果が得られないときに、どちらかの高校を選ぶ、ということが私は一番嫌なことじゃないかと思っておりますので、案2のキャンパス制という形で、持続可能な両校の存続というのを指すというのがいいんじゃないかと考えます。</p>
八田委員	<p>四万十町さんの強い決意というか、これも非常に重たく受け止めるんですけども、私も少し木村委員もおっしゃったように、町の意見がもう一つ理解できていないのは、キャンパス制と現状維持とをどう比較して、なぜ案1がいいのか、というところが十分に理解できていなくて、ひょっとするとキャンパス制のメリット、デメリットを十分に考慮されていないんじゃないかなという気がします。</p> <p>キャンパス制にするということは、一応統合するということになる。統合すると、どうせいずれ1キャンパスになるんでしょ、というような不安を抱いているのかもしれないけど、我々はそういうつもりはなくて、キャンパス制というのは、これから中山間の高校を、何とかして残していく一つのモデルの案じゃないかと。どうやって中山間の小さな高校を残すか、という一つのモデルとして、これから取り組もうというところなので、そこをもう少しご理解いただけたら、案2で、それに対する支援をしていただく方がずっといいんじゃないかという気がしています。</p> <p>例えば窪川高校は窪川中学校からの進学が非常に少なく、50%を超えるところが目標だと思んですけども、そこに向けて例えば窪川高校で考えておられる第1の活性化案というのはクラブ活動、部活動なんですね。その部活動を活性化するのにどちらがメリットがあるかという、先ほどの資料を見ていただいたら分かるように、部活動はいろんな意味でキャンパス制で統合した方がやりやすくなるというメリットがある。それから ICT をもっと活用しようというときにも、一つの高校として ICT を活用する、キャンパス制でどう使うか、という取組の方が非常に将来性がある。</p> <p>ただ、これまで高知県はキャンパス制というのはないので、もちろんいろいろな見落としやリスクがあるかもしれないけども、「とにかく窪川高校も四万十高校も今の状況で頑張れ」というのは、少し残酷じゃないかと思えます。これだけ生徒が減っていくことは見えているし、窪川中学校の子がここまで頑張っても、とにかく窪川高校に来てくれないのが分かっているのだったら、もう思い切って模様替えして、全く違う新しい高校ですよ、というぐらいの魅力的な一つの高校、かつキャンパス制という方が、支援をもっと有効に活かせるんじゃないかと、私は感じていました。以上です。</p>
伊藤教育長	<p>今、八田委員からも木村委員からも、四万十町がキャンパス制では賛同できない、という部分について何か説明できますか。</p>
山岡企画監	<p>四万十町からキャンパス制という考え方というところでは、まず実質的にはキャンパス制は統合ということですので、校名変更による学校のイメージというところ</p>

	<p>ころがあるというところで、八田先生が今言われたように、単なる統合ではイメージダウンになるのではないかと。新たな高校として生まれ変わるようなイメージにならざるを得ないのではないかとということなのです。</p> <p>それと、生徒さん及び教員の移動による物理的な経済的負担といったようなところ。また、少人数でも教育効果が期待できる教員配置が、キャンパス制で可能なのかとか、そういったようなところが四万十町から言われているところがございます。</p> <p>おそらく、いわゆるキャンパス制は結局は統合になるので、全く新しい学校でスタートということもすごい議論があると思います。例えば、これまでの窪川高校と四万十高校の両校の名前を一切やめて、そうなると校歌も変わる、スクールカラーも変わる、それから校章も変わる、というようなところまで踏み込んだ議論になるような、このキャンパス制になっていくと思います。</p> <p>窪川高校のままで窪川キャンパス、四万十キャンパスになると、イメージ的には四万十高校が窪川高校に吸収されたみたいなイメージになる。そのあたりで、ほぼ統合と同じような作業が出てきて、労力がかかってくるので、そこは現在のままで現在の中山間の学校に全力を注力していきたいということなんだろうと思います。</p> <p>4名の委員さん、今日は永野委員が来られませんが、4名の2対2ということになってきていますけども、どうでしょう、できるだけ今日、決めていきたいと思うのですけども。</p> <p>確かに教育機会や教育の質、元々今のこの状況で教育の質が担保できるかという状況で議論が始まっています。そこは十分注意をせんといかんですし、そこをもう地元もしっかり理解されたうえで、とにかく一生懸命頑張らせたいたいというような話だと思います。平田委員、中橋委員が言われたように、何らかの書き込みをした上で教育内容の低下とか、懸念されるような状況になった場合には、それなりの対応はしていくということは書いたうえで、案1の現状、学級数をどうするかというのはまた別の問題ですけれども、学校としては案1でいきたいと少し思いますけども、木村委員、八田委員、いかがでしょうか。</p>
八田委員	<p>なかなか厳しいとは思いますが、どちらか選択しなければいけないということですね。私はどうしてもキャンパス制が魅力ですが、よく分かりません。リスクも非常にあるんですけども、今の中学生にとって窪川高校のこれまでの伝統、培ってきたものが現状で魅力的に見えてないとすると、本当に今のまま維持するのか、存続の方向性かというのは少し疑問を感じますけども、そう決めれば、それで頑張るしかないということなので。</p>
木村委員	<p>私もそうです。</p>
伊藤教育長	<p>そういったお話をお二人の委員からもいただいていますので、この教育委員会協議会の今回としましては、案1ということで、どういう学校で、というような、何らかの書きぶりは必要だと思いますので、そこは何か事務局の中でも少し議論させていただきたいと思っておりますけども、協議会としましては案1で取りまとめをしたいと思っております。よろしくお願いたします。</p>

**【閉会】**

伊藤教育長	それでは、予定していました議題につきましては以上で終わりましたので、事務局から連絡ありましたらお願いいたします。
山岡企画監	次回の教育委員会協議会はパブリックコメント案の最終とりまとめでございます。9月5日（水）ここで共済会館で18時から行いたいと思いますので、またよろしくお願いいたします。以上でございます。
伊藤教育長	そうしましたら、本日の教育委員会協議会はこれで終了いたします。どうもありがとうございました。